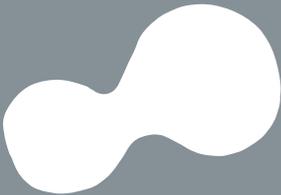




世界は、
出会いから
はじまる。



ごあいさつ

きょうと障害者文化芸術推進機構では、平成29年度「共生の芸術祭 Hello World」を開催し、多くの方に足をお運びいただきました。出品者の方々、開催にあたりご協力いただきました皆様、そしてご来場いただきました方々に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

本機構は、芸術文化活動を通じて障害者の理解と社会参加の促進、そして共生社会の実現を目指して、平成27年12月に設立されました。昨年度は、ギャラリースペース《art space co-jin》での展覧会やワークショップ、人材育成講座等を継続的に開催いたしました。さらには障害のある方の芸術作品のデジタルアーカイブ化の事業にも着手し、京都府内で生み出されている感性豊かな作品の数々を、より多くの方に知っていただくための取り組みにも力を入れております。

「共生の芸術祭」も当機構の重要な事業であり、平成29年度は初めて、京都府内三会場での同時開催が叶いました。イオンモール京都桂川での「Hello World」展では、障害のある作家たちのユニークな視点に触れることで、見慣れたはずの世界を新しく捉え直すきっかけになればと開催いたしました。京都府立文化芸術会館での「虹の上をとぶ船—八戸から届く版画の世界・坂本小九郎とこどもたち—」展は、八戸にて教員と生徒たちとの協働により生み出された大画面で力強い版画作品を、関西地域にて一堂に会するまたとない機会となりました。さらにはart space co-jinにて、「ぼくはふたりいるんだ」と題して、平野智之という同姓同名の作家による二人展を開催いたしました。本記録集は、これらの展示の様子を紹介するものです。

本機構では引き続き、障害の有無に関わらず、さまざまな人々が文化芸術を通して相互理解を深める場を作りながら、より豊かな社会の創造に邁進していきたいと考えております。最後になりましたが、今後も私どもの活動をご理解いただき、ご支援を賜りますことをお願い申しあげて、ご挨拶にさせていただきます。

きょうと障害者文化芸術推進機構長
(京都国立近代美術館館長)

柳原 正樹





共生の芸術祭 Hello World について

(展示会場掲示文より)

平成 29(2017)年度 共生の芸術祭「Hello World」の開催にあたり、ご理解とご協力を賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。

共生の芸術祭は、共に生きることをテーマとして、障害のある方の創作や表現を紹介してまいりました。第4回を迎える今年度のタイトルは「Hello World」。コンピュータプログラミング冒頭の言語になぞらえ、本芸術祭を出展者各々の世界に通じる場として位置付けたものです。

私たちが見ているのはどんな世界でしょうか？例えば、地球が丸いということを実際に見た人はほとんどいないでしょう。実際にいつも何気なく見ている景色や道端の小さな石でさえ、自分以外の人の目には違って映っているのかもしれない。私たちは互いに違う視点から世界を見ており、共通して同じ世界を見ることはできません。だからこそ、他者の目が捉えた世界に触れた時、幼い頃に初めて見るモノや動物に出会った時のような新鮮な気持ちをもって、自分とは違う世界の見方に気づくことができるのではないのでしょうか。

本芸術祭でご紹介する作品の数々にも、つくり手一人ひとりの独自の世界が描かれています。そうした表現との出会いを通じて、私たちが今まで見ていた世界を新しく捉え直し、受け入れ、そして共に生きることを考えるきっかけとなれば幸いです。

今年度の共生の芸術祭は会場を3カ所に広げ、イオンモール京都桂川では8作家の作品が共演。京都府立文化芸術会館では中学校教諭と生徒たちが生み出した版画の数々、art space co-jinでは同姓同名の2作家による“ふたり展”と、より多様な出展者の作品をご紹介します。

Hello World! 新しい世界へつながる“出会い”をお楽しみください。

きょうと障害者文化芸術推進機構



CONTENTS

ごあいさつ	p.2	Exhibition 2	
共生の芸術祭 Hello Worldについて	p.4	虹の上をとぶ船	p.72
		展示概要	p.78
		作家紹介	p.79
		展示	p.80
		イベント	p.94
		Exhibition 3	
		ぼくはふたりいるんだ	p.96
		展示概要	p.98
		作家紹介	
		平野智之(兵庫)	p.100
		平野智之(東京)	p.104
		イベント	p.108
		寄稿1	p.111
		寄稿2	p.112
		作品リスト	p.114
		アンケート	p.116
		事業実績	p.118

展示記録

Exhibition 1	
Hello World	p.10

作家紹介

平田猛	p.16
八島孝一	p.22
村田清司	p.28
濱中徹	p.34
川上建次	p.40
戸田雅夫	p.46
国保幸宏	p.52
中村清剛	p.58
ダブディビ・デザイン +みっくすさいだー	p.62

イベント1	p.66
イベント2	p.68
イベント3	p.70



Exhibit Record

展示記錄

Exhibition 1

Hello World

イオンモール京都桂川 竹の広場

「Hello World」をテーマに、私たちの見ているこの世界の認識を新しくしてくれるような作家の展覧会を開催します。日々繰り返し描かれる大量のドローイング、道端に落ちていたものを集めて作られる小さなオブジェ、言葉の綴られた自作のおみくじを用いたパフォーマンスタなどの作品を通じて、私たちがこの世界と出会った時の感覚を思い出させてくれるような多様な表現を紹介します。

第1会場「イオンモール京都桂川 竹の広場」

展覧会タイトル「Hello World」

- 住所** 〒601-8601 京都市南区久世高田町376番1
- 期間** 2018年2月2日(金)～2月4日(日)
- 時間** 10:00～21:00(最終日2月4日(日)は19:00まで)
- 内容** 各作家作品展示、イベント

展示作家

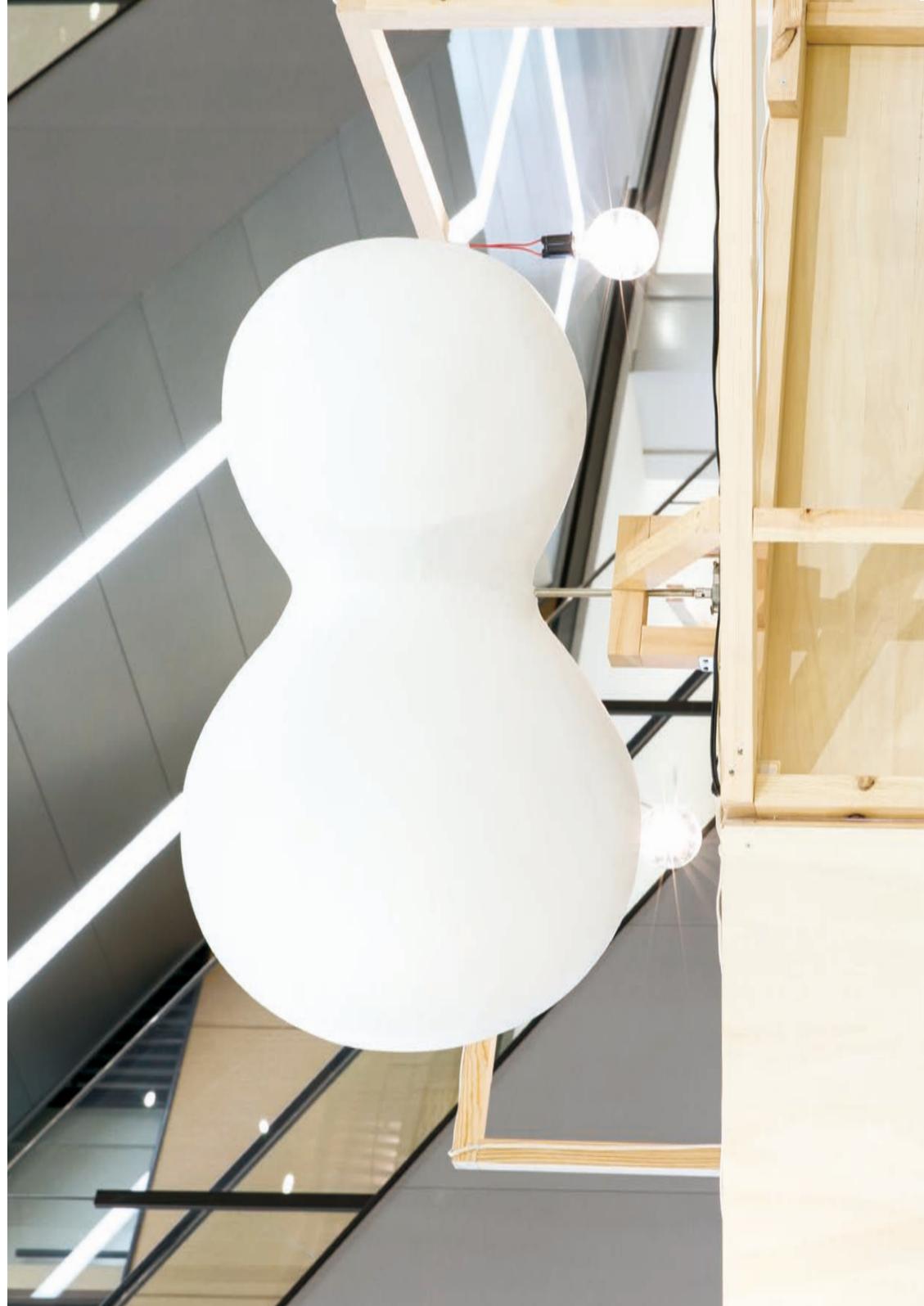
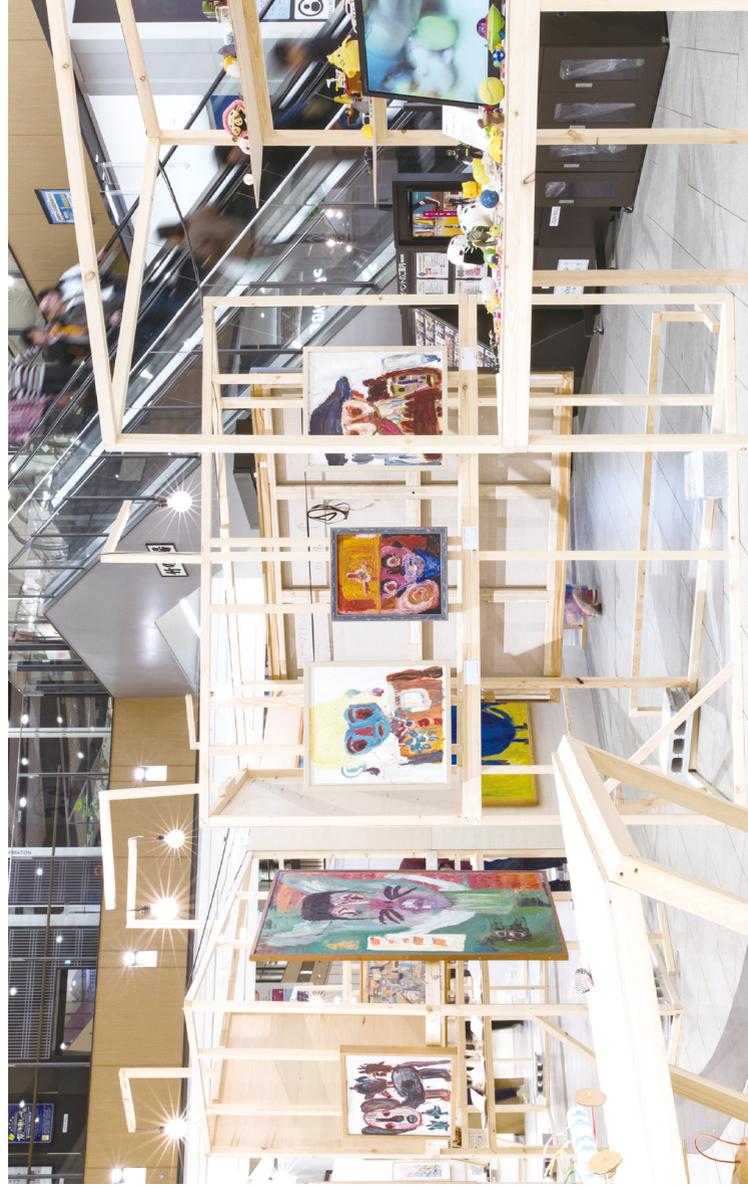
平田猛(京都)、八島孝一(大阪)、村田清司(滋賀)、川上建次(三重)、戸田雅夫(岡山)、国保幸宏(京都)、濱中徹(京都)、中村清剛(兵庫)、ダブディデザイン+みっくすさいだー(京都)

関連イベント

- 「共生の芸術祭セレモニー」2月2日(金) 11:00～11:30
- 「とだのま IN 京都」2月2日(金) 13:00～17:00
- 「作ってあそぼう！ココロひろば」みずのてつおワークショップ
2月3日(土) 11:00～16:00



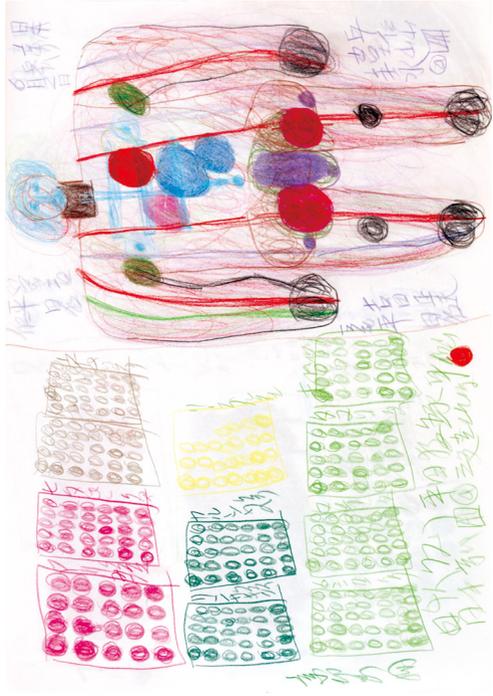




平田 猛

HIRATA Takeshi

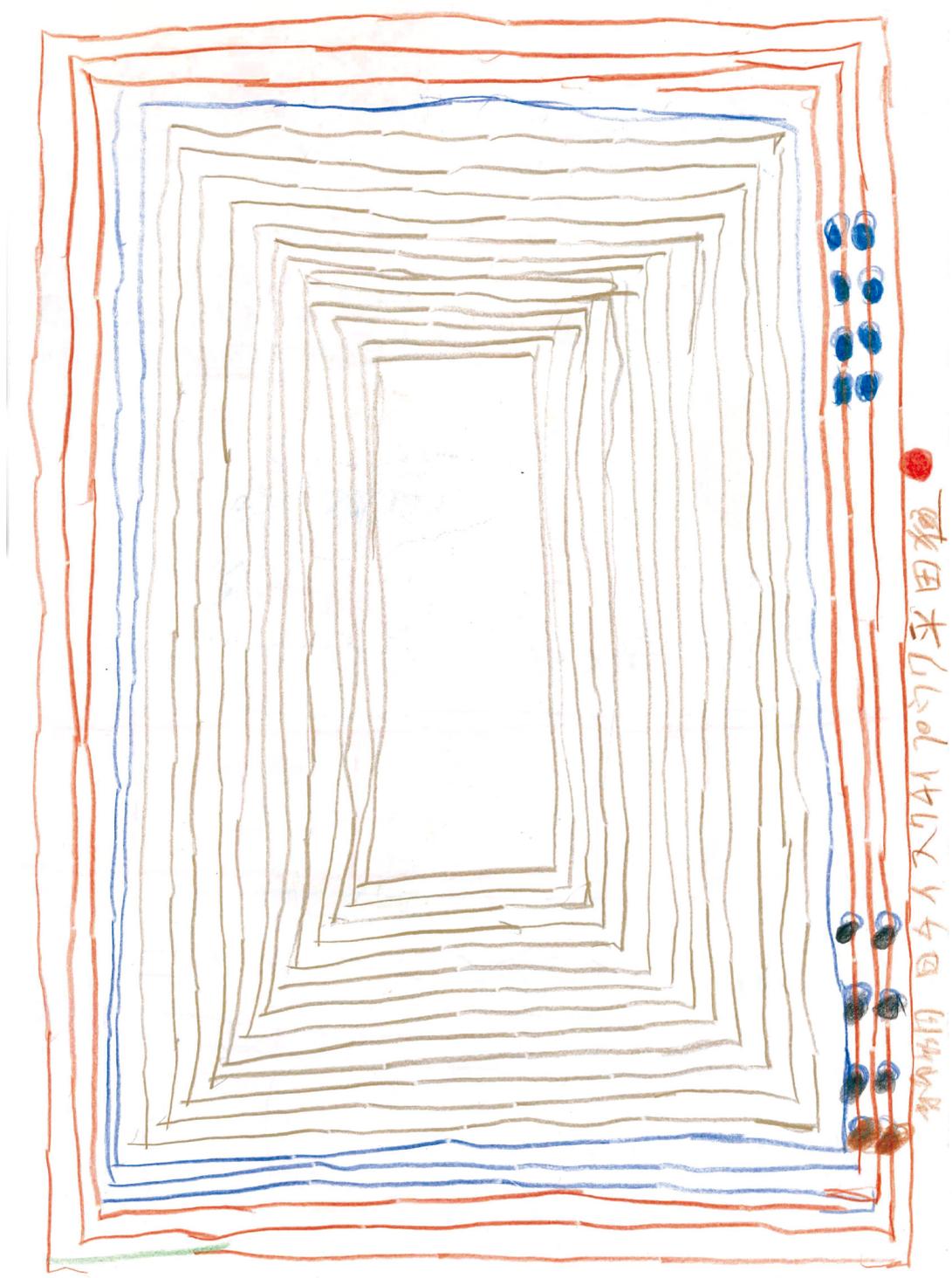
毎日、ベッドの上でスケッチブックに絵を描き続ける平田猛。そこには内臓と思わしき丸で構成された人体から始まり、さまざまなおモチーフが描かれています。注意深く見てみると、どうやらテレビや新聞などのメディアから仕入れた情報も混ざっているようです。



大量のスケッチブックに収められた膨大なドローイングは、自らの外側に溢れている情報や出来事から人体の内部を分析しようとする試みではないかと考えられます。例えば、頻繁に登場する「ヒモ(紐)」や「プタ(彼は豚をプタと書く)」は人体に描かれた線や図形に対応しているようにも思えます。私たちは自分自身の肉体の所有者でありながら、その内部をすべて見ることはとても困難です。その不可知なものに対する興味が平田のドローイングの行為の根底にあるのではないのでしょうか。そんな私たちの考察をよそに平田の絵は今日も描き続けられています。

1936年生まれ 京都在住
 (一般財団法人 川越病院所属)





八島 孝一 YASHIMA Koichi



八島孝一の作品は、施設に通う途上の道端に落ちていろいろいな物を拾い集めることから始まります。そのほとんどが手のひらに乗るほど小さく、それらをゼロハンテープでくっつけること

によって「宇宙船」や「テーブルコーダー」と題される小さな立体が制作されます。そのように名付けられたタイトルと立体作品とを照らし合わせると、その小さな作品の中に広がる豊かな世界を想像せずにははいられません。

拾い集めた物に対する八島の愛は、それを見つめるうっとりとした眼差しや物を愛でる手つきから感じとることができます。八島は私たちが見落として、あるいは落としてしまった物を拾い、愛でることによって、その立体の中に愛に満ちた小さな物語を作り出します。

立体の制作は2000年頃より行われなくなりましたが、物を集める行為は続いています。本展では施設や家族の方によって保管されていた数点の作品を展示するとともに彼が現在も日常的に続けている収集という行為に焦点を当てた構成となっています。

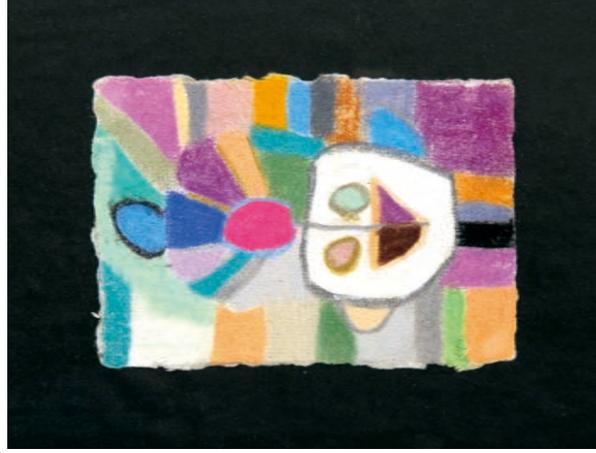
1963年生まれ 大阪在住
(社会福祉法人 日本ヘレンケラー財団 ぶるうむ此花所属)







村田 清司 MURATA Seiji



村田清司の描く絵は、小さな宝石のよう。彼の作品を物語として構成した絵本が「世界で最も美しい絵本（※）」に選出されるなど国際的にも高く評価されています。作品の特徴として挙げられるのが「小ささ」「和紙」という要素です。はがきサイズの小さな和紙にカラフルな色が塗り分けられ、よく見るとその中に笑顔が描かれているのが分かります。その小ささゆえに「絵」を見るというよりは、小さな「物」を覗いている感覚に近く、また端の整っていない和紙の物質的な側面も目立ってきます。その2つの効果により、絵画でありながらも、色彩を纏った小さな立体を見つめるように感じてしまうのかもしれない。そこに現れる宝石のような笑顔は、私たちに不思議な幸福感で満たしてくれるのです。

※ドイツ「世界で最も美しい絵本」
佳作受賞の絵本『きみのころのあじがす』
え：村田清司、ことば：田島征三

1936年—2015年 滋賀
(社会福祉法人 しがらき会 信楽青年寮)







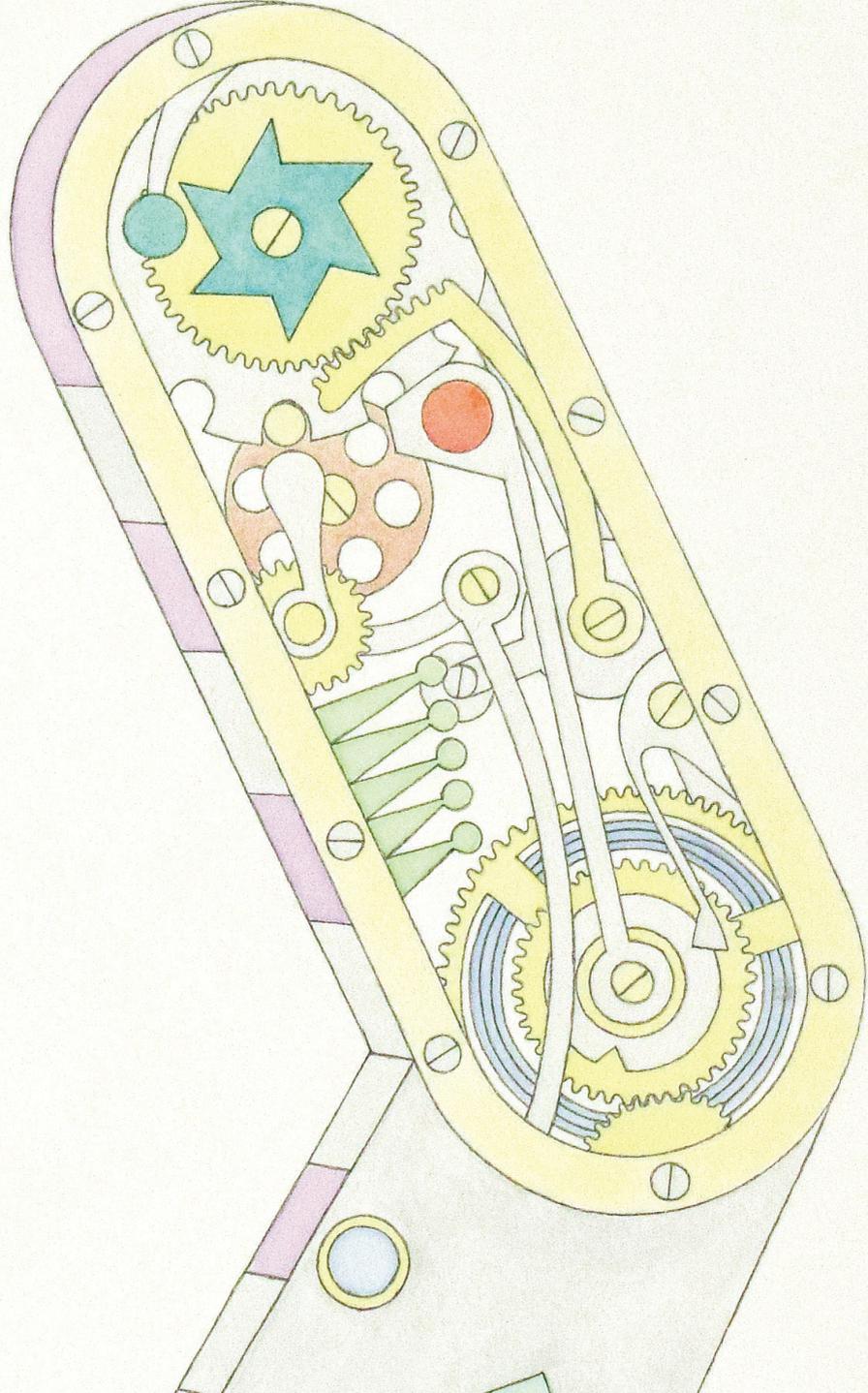
濱中 徹 HAMANAKA Toru



ちいさく、ささやかで、やさしい世界の中へ迷い込んだような気分になる作品たち。ある絵には鉱石でできたラジオに耳を傾ける植物、ある絵には機械式時計の虫が飛び、またある絵にはオリジナル機能をもつカメラが描かれ、1枚1枚の絵の中でさまざま物語が展開されます。

余白が充分にとられた構図、淡い色彩の美しさ、何より驚くのは彼の描く線が筆によってフリーハンドで生み出されていることです。また、繊細な観察力も独自の世界を形成しています。彼自身が「道端で立ち止まって、いろんなものを観察するのが好き。12月でも、探せば3月は春の花が見つかると語るように、あえて道の途中で立ち止まり、いつのまにか既知のものとして認識してしまいがちなこの世界を注意深く観察することから彼の描く絵は生まれています。

1948年生まれ 京都在住







川上 建次 KAWAKAMI Kenji



荒々しいタッチの、人や動物が覗くぎょろっと見開かれた目。大きいものでは100号の油彩を描き出す川上建次の制作拠点は三重県松阪にある施設「希望の園」。地元では「画伯」の呼び名で親しまれ、海外での評価も高い作家です。

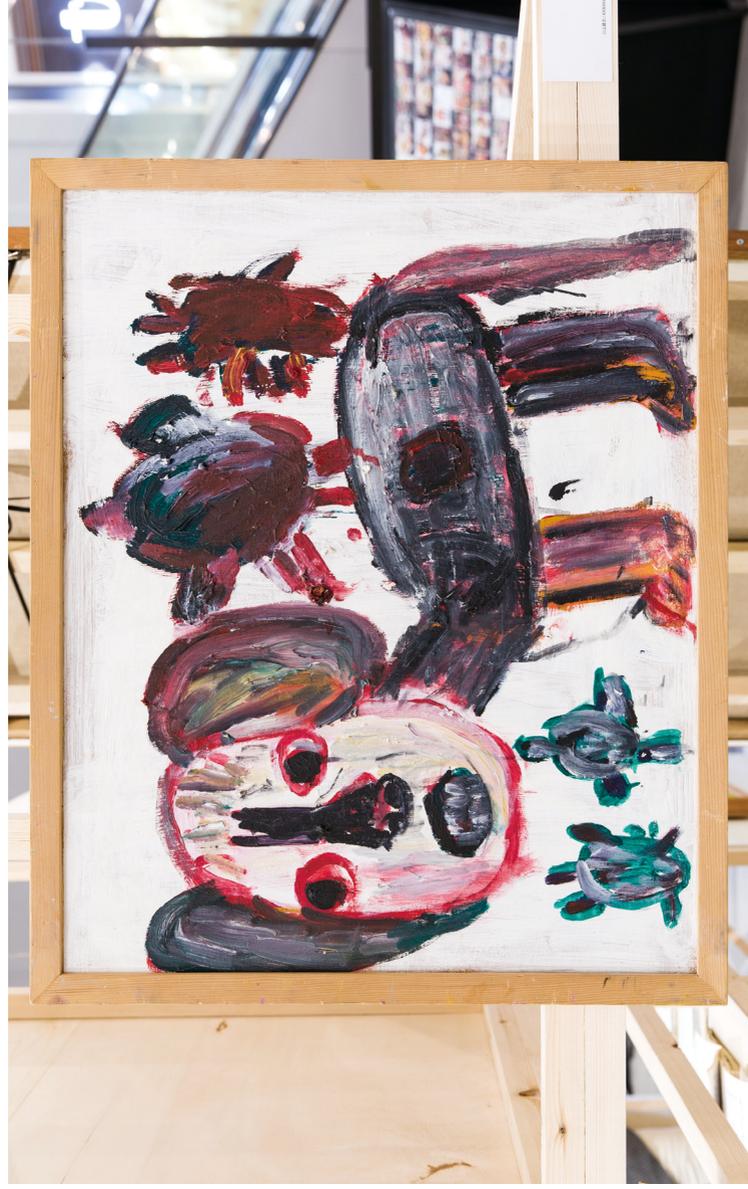
川上作品の特徴である呆然と見開かれた目は、その目の先に何かを読み解こうとする者をつくさま欷み込んでしまうようであり、私たちはその絵の人物のように呆然と絵の前に立ち尽くしてしま

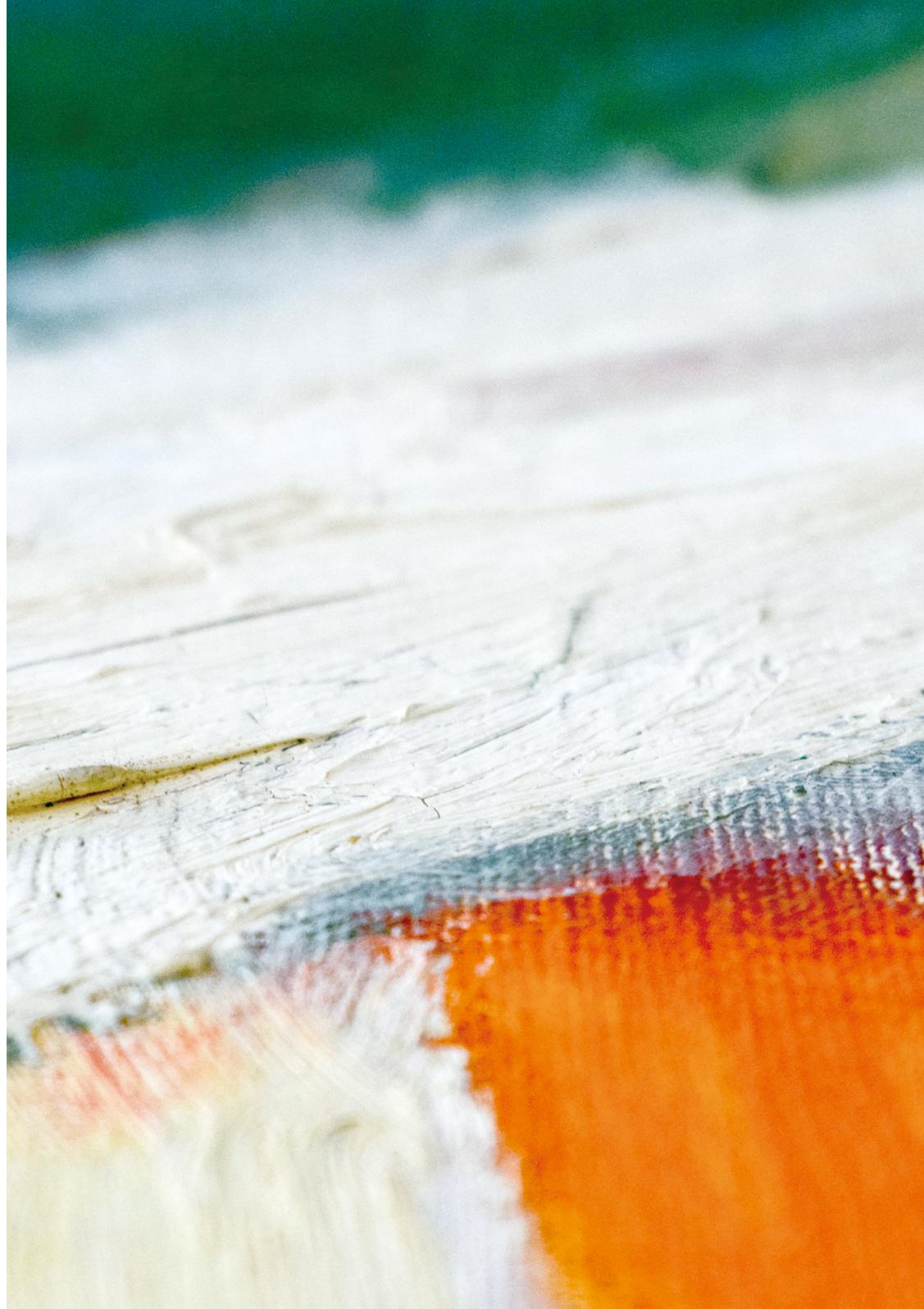
う感覚さえ覚えます。

しかし、描かれているのは川上の親しい人たちと出来事やそこから生まれた物語。「流血雄也」は友人の雄也くんがブッチャーと試合をして頭から血を流しているところを描いたもの。血が飛び出し、画面は真っ赤に染まっていますが、恐ろしさというより、どこかコミカルな雰囲気さえ漂っています。他の作品にもそれぞれ絵の元となる出来事があり、絵と物語が不思議なバランスで共存することで、川上作品は1つの絵画として強い強度を保っています。

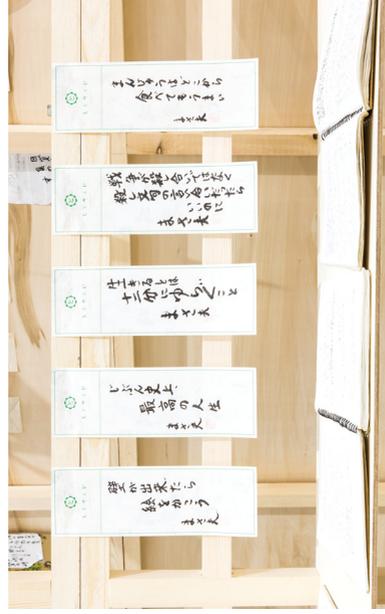
1953年生まれ 三重在住
(特定非営利活動法人 希望の園所属)







戸田 雅夫 TODA Masao



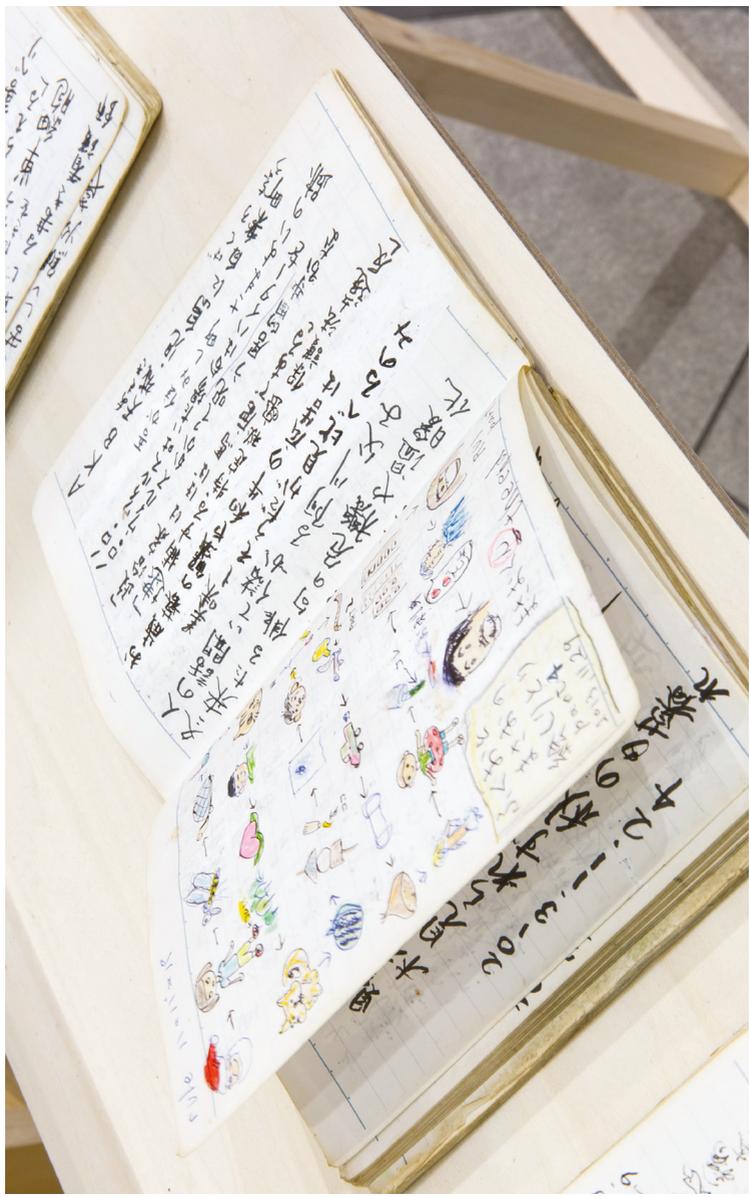
岡山にある生活介護事業所「ぬかつくるとこ」に通う戸田雅夫は、施設のスタッフとともにさまざまな試みを行っています。本展初日に開催された「とだのま（※）」もその一つ、彼が営むお店で「とだみくじ」を引くことのできる体験イベントです。

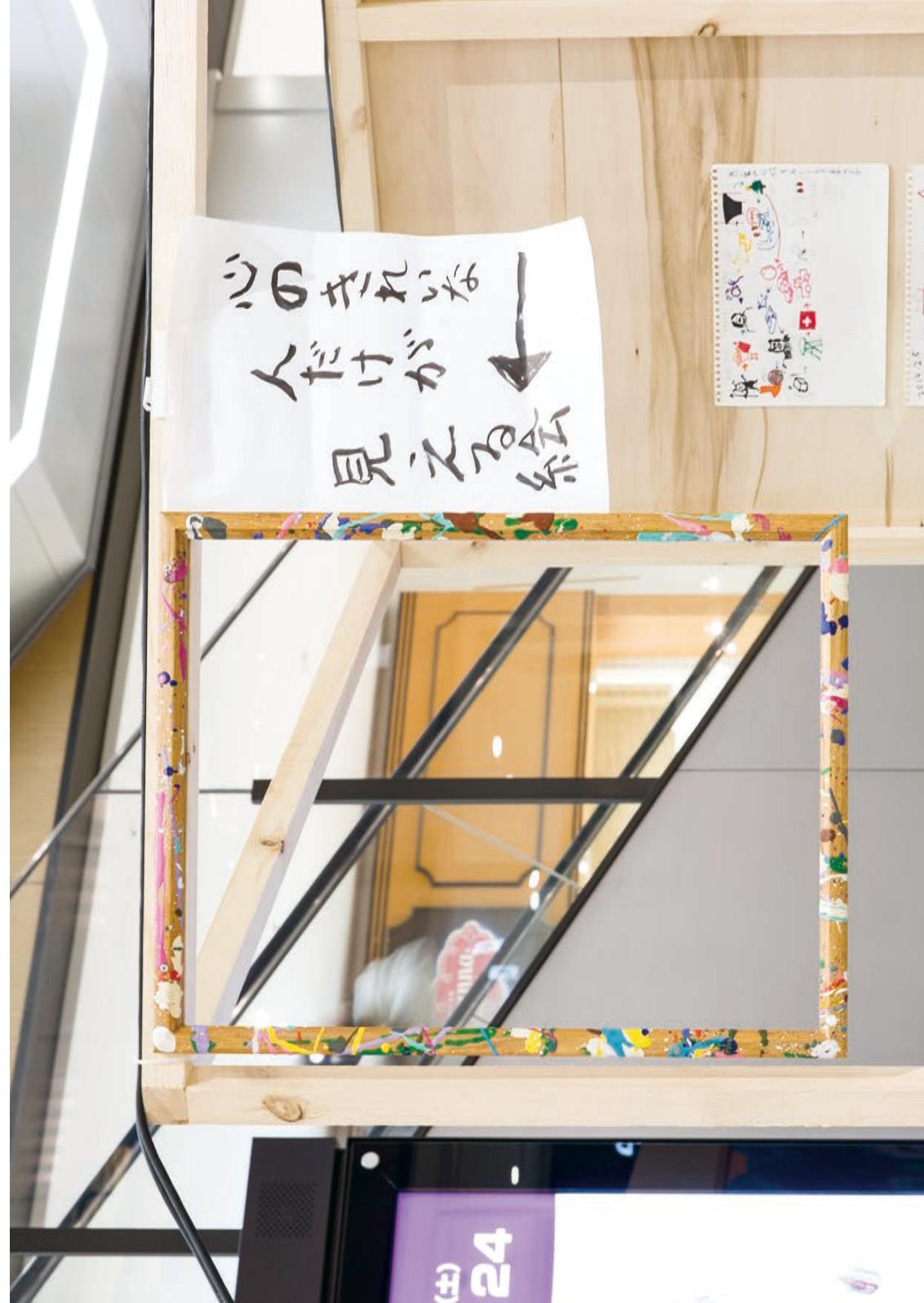
この「とだみくじ」は、神社などで吉凶を占うおみくじとは趣向の違うもので、そこには些細だけれど少しおかしい、優しく時に鋭い、戸田の何気ないひと言が書かれています。しかし、「言葉をもらう」とは不思議な出来事です。「とだのま」で買うことのできる言葉は手紙のように、特定の誰かに向けて書かれたものではありません。戸田がふと思った言葉が、運命のように、あなたのための言葉となり、あなたのもとへ届くのです。そこに神様はいませんが、それに代わるものを感じてしまうような、不思議な感覚に陥るのではないでしょうか。本展ではこの体験イベントの他にも、彼のユーモア溢れる鋭い言葉の数々を展示しました。

(※「とだのま」は2/2(金)のみ。3(土)・4(日)はその様子を記録映像として展示を行いました。)

1958年生まれ 岡山在住
(生活介護事業所ぬかつくるとこ所属)







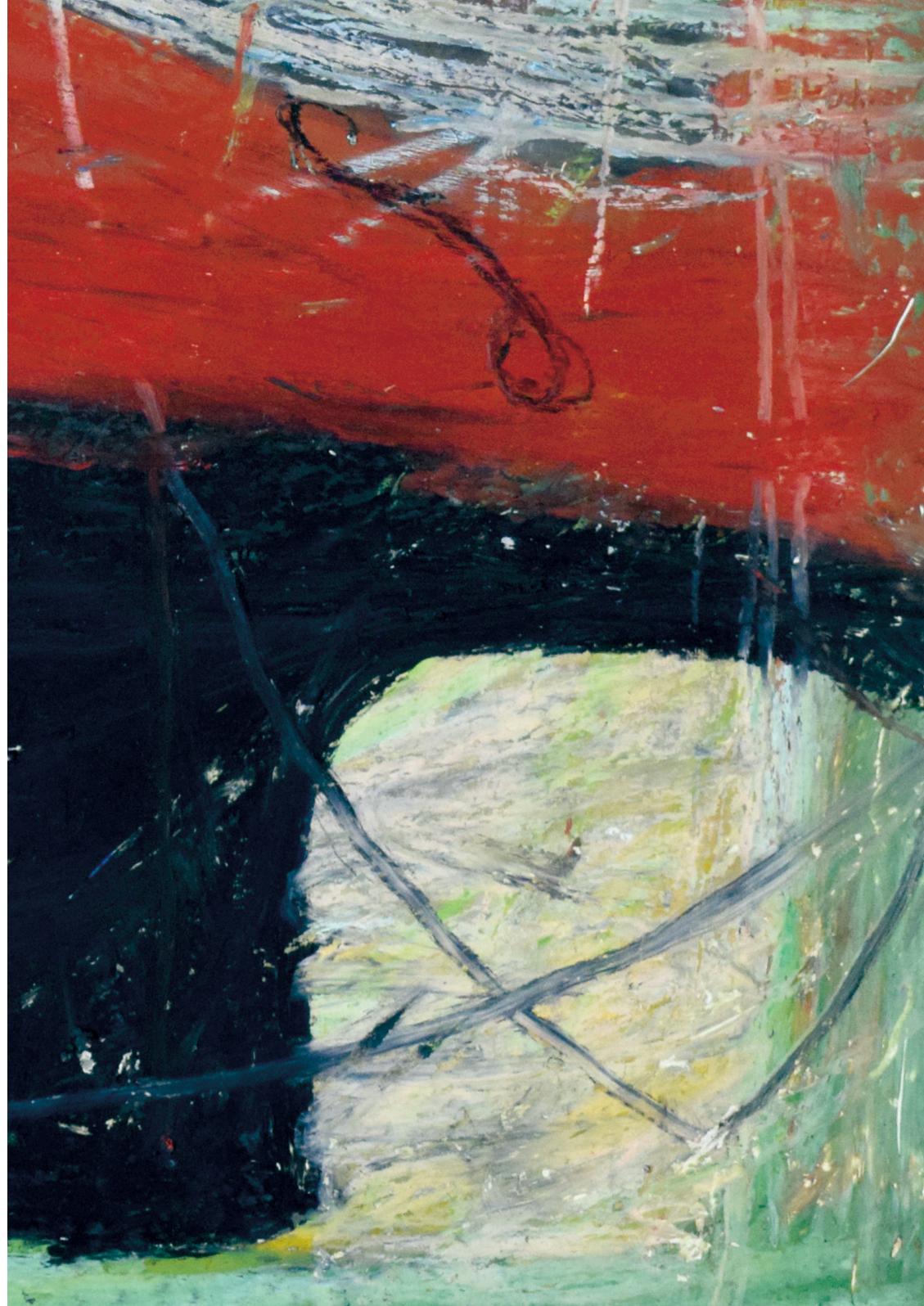
国保 幸宏 KOKUBO Yukihiko



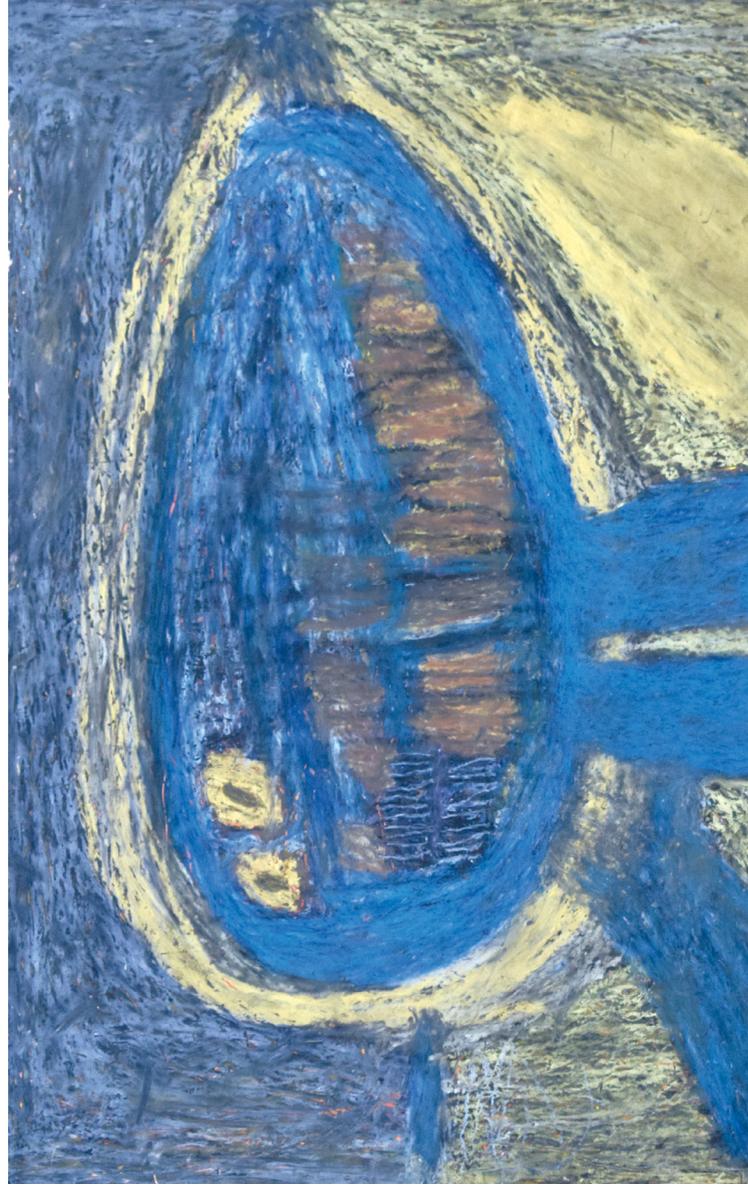
「チェリスト」は、チェロ奏者の揺れを大胆な構図で描いた作品です。何重にも描かれているチェリストは、その演奏を長時間露光したような時間性を内包しています。また、大きく伸びやかなタッチからは、彼がこの絵を描くときに、チェロ奏者のような動きをしていたのではないかと想像するに難くありません。

そしてこの絵には、目に見えないもう一つの時間性が有されています。それは国保作品の特徴である、クレヨンを何層にも重ねて描くというスタイルによるものです。彼の絵を手にするとも一枚の紙とは思えないほどのずっしりとした重さがあり、彼が絵を描くという行為に費やした時間の堆積を考えずにはいられません。私たちの目が捉えることができるのはその表面にのる色彩だけかもしれませんが、そこには時間をかけて描かれた見えざる色彩が地層のように眠っているのです。

1974年生まれ 京都在住
(京都市ふしみ学園 アトリエやっほう!! 所属)







中村 清剛 NAKAMURA Kiyotaka

さまざまな生き物を描いて切り抜く、中村清剛。ツメやタテガミの細部までハサミを駆使し、高い技術で無尽蔵に生み出される作品には生き物への深い慈愛が感じられます。

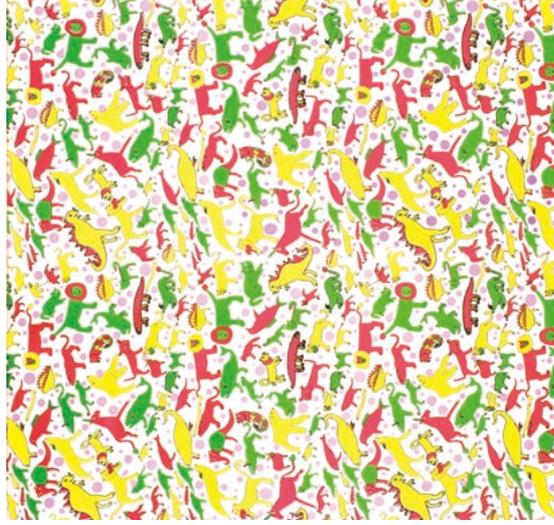
その作品の裏には鳴き声を書かれています。絵の生き物を見て、どんな鳴き声を想像するでしょうか。例えば、それが私たちの知る「猫」ならば、容易に「ニャー」と想像することができそうですが、それが中村の考えたオリジナルの生き物「タイラコルミルスオプサーベル」であればどうでしょう。未知の生き物への想像は、私たちが初めて他者に出会った時の感覚を思い起こさせるかのようなのです。

1986年生まれ 兵庫在住





ダブデイビ・デザイン + みっくすさいだー Dabudivi Design+Mixsider



終伸江が運営する株式会社ダブデイビ・デザインは、福祉 (Welfare) とビジネス (Business) をデザイン (Design) でつなぐというコンセプトのもと、障害者アートを原画としたオリジナル商品やコラボレーション商品の企画、製造、販売を行っている会社です。自社ブランド「ダブデイビ・デザイン」と本展に出展している中村清剛も参加した「みっくすさいだー」のグッズ紹介と併せて、これまでの製品づくりに採用されてきた原画作品の数々を展示します。

ダブデイビ・デザイン

株式会社ダブデイビ・デザイン
社名の由来は、アルファベットの W (ダブ)・D (デイ)・B (ビ) を組み合わせた造語。福祉 (welfare) とビジネス (business) をデザイン (design) でつなぎたい、そんな思いを込めて名付けました。障害のある人の表現力や働く力の可能性を感じ、そのエネルギーとパワーを社会に発信するため、福祉現場と福祉に接点がない世界とをどのようにつなぐかを日々考えています。障害者アートを活用した商品企画の他に授産製品の商品開発支援や福祉事業所のデザインコンサルティング、はあと・フレンズ・ストア (京都市) ブランドマネージャー、その他セミナーや研修の企画などを行っています。(終)

みっくすさいだー

障害のある人と若手デザイナーの感性が混ざりあって生み出されるキュートでハワフルなデザインが特徴。ブランド名であるみっくすさいだーには、既存の枠にはまらないアウトサイダーアートの豊かな感性をデザインに mix するという意味が込められています。明るく元気な子供たちとそのママに、かわいくてユーモラスで happy なデザインを提案します。(終)

※みっくすさいだーは、株式会社ダブデイビ・デザインが運営するオリジナルブランドです。





Event 1

「共生の芸術祭 Hello World」 セレモニー

平成30年2月2日(金) 11:00-11:30
イオンモール京都桂川 竹の広場

- 1 | 開会
- 2 | 主催者あいさつ
きょうと障害者文化芸術推進機構長 柳原 正樹
- 3 | 出展者紹介
国保 幸宏、戸田 雅夫、濱中 徹、平田 猛、八島 孝一
- 4 | 出展者紹介
アトリエみゆみ 塾主宰/京都造形芸術大学こども芸術学科名誉教授
水野 哲雄氏
イオンモール株式会社イオンモール京都桂川
営業マネージャー 久保田 淳子氏
京都府健康福祉部副部長 青木 賀代子氏
- 5 | オープニングデコレーション
「世界との出会いを象徴する、本展覧会のモチーフとなったピーナツ型の大きな青いシールを、出展者が自作品の傍や床など会場内の好きなところにベタッ。展示空間と作者との出会いが痕跡となり、会場の彩りとなりました。」



Event 2

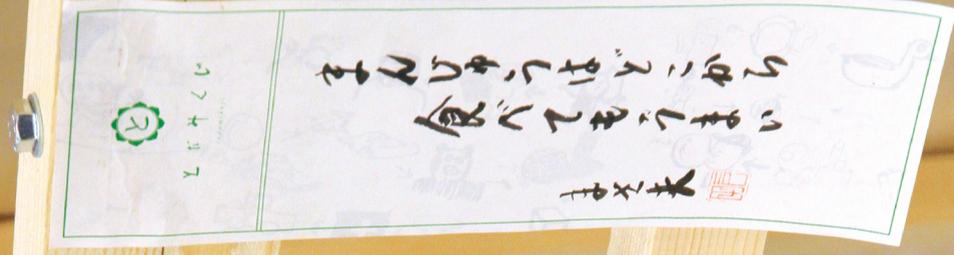
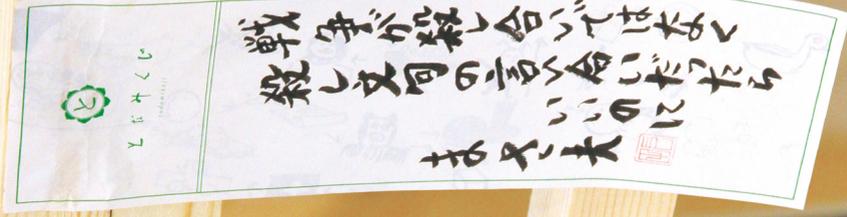
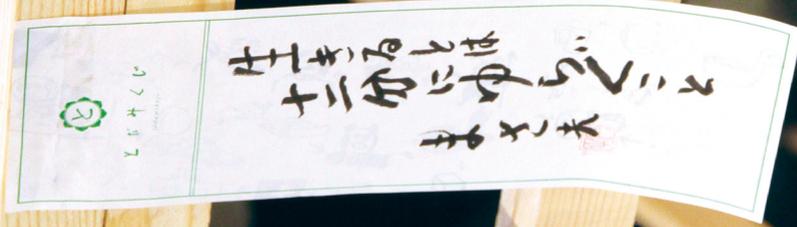
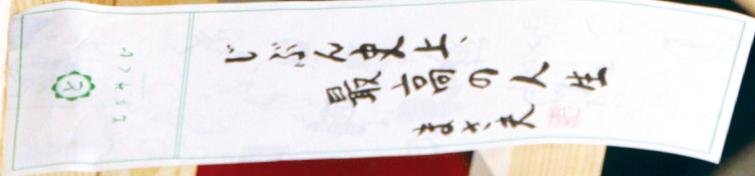
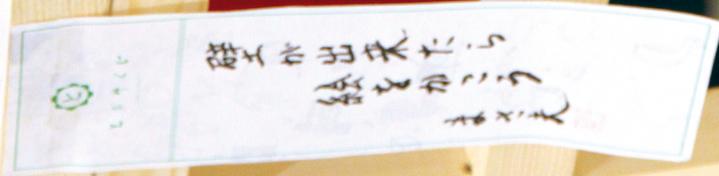
とだのま IN 京都

2018年2月2日(金)

イオンモール京都桂川 竹の広場

料金：1枚 200円

「とだのま」とは、戸田雅夫(戸田さん)が営む「とだみくじ(おみくじ)のお店。些細だけれどずこしおかししい、優しく、時に鋭い戸田さんの言葉。「とだみくじ」あなたも一枚ひいてみませんか？



Event 3

みずのでつおワークシヨップ 「作って遊ぼう コロコロひろば」

2018年2月3日(土) 11:00-16:00

イオンモール京都桂川 竹の広場

参加無料 参加随時

身近なものを使って転がるものを作ろう。コロコロ転がして、速さや距離を競ったり、転がる表情の面白さを選んだり、転がる跡が絵のようになってりと、いろいろ工夫してどんなものができるのか作って遊ぼう。

みずのでつお氏とアートSKY 塾メンバーによる子供向けワークショップを開催。身近にある不要になったモノを集め、ビモや探着剤、テープで組み合わせて新しいかたちを創作することで、日常では気付くことなかった視点から新しい価値を生み出す。レッドカーベットの展示台を舞台に、作ったものを転がしてスピードを競ったり、特別なルールを決めたり、試行錯誤のめとを形にしました。

今回は会場であるイオンモール京都桂川のご協力をいただき、各ショップから「不要と思われたモノ」が提供されました。そうして素材となった紙コップやハンガーには新たな命やルールが吹き込まれ、それらは子供たちのよいおもちゃへと姿を変えま

しました。

講師 | みずのでつお (水野哲雄) 氏
アトリエみ塾主宰/京都造形芸術大学名誉教授

協力 | アートSKY塾、藤田一美 (京都市こみ減量推進会議)、
イオンモール京都桂川



Exhibition 2

虹の上をとぶ船

—八戸から届く版画の世界・坂本小九郎とこどもたち—

京都府立文化芸術会館 1階展示室

1956年(昭和31)から1980年(昭和55)の25年間、青森県八戸市の中学校において、坂本小九郎氏の指導のもと、各校のこどもたちが制作した版画をご紹介します。漁港の暮らしや、漁師の間で伝承されてきた物語を表した初期作品から、うみねこや海の風景などを描いたドライポイントの作品、湊中学校養護学級のこどもたちによる共同制作「虹の上をとぶ船」シリーズの完結編まで49点。こどもたちの版画から見える地域の歴史や暮らし、願いや希望が、1人の教師によって引き継がれ結実するまでの、壮大なイメージの物語が並びました。

第2会場「京都府立文化芸術会館 1階展示室」
展覧会タイトル「虹の上をとぶ船 —八戸から届く版画の世界・坂本小九郎とこどもたち—」

住所 〒602-0858 京都市上京区河原町通広小路下ル
東桜町1

期間 2018年1月30日(火)～2月4日(日)

時間 10:00～18:00(最終日2月4日(日)は16:00まで)

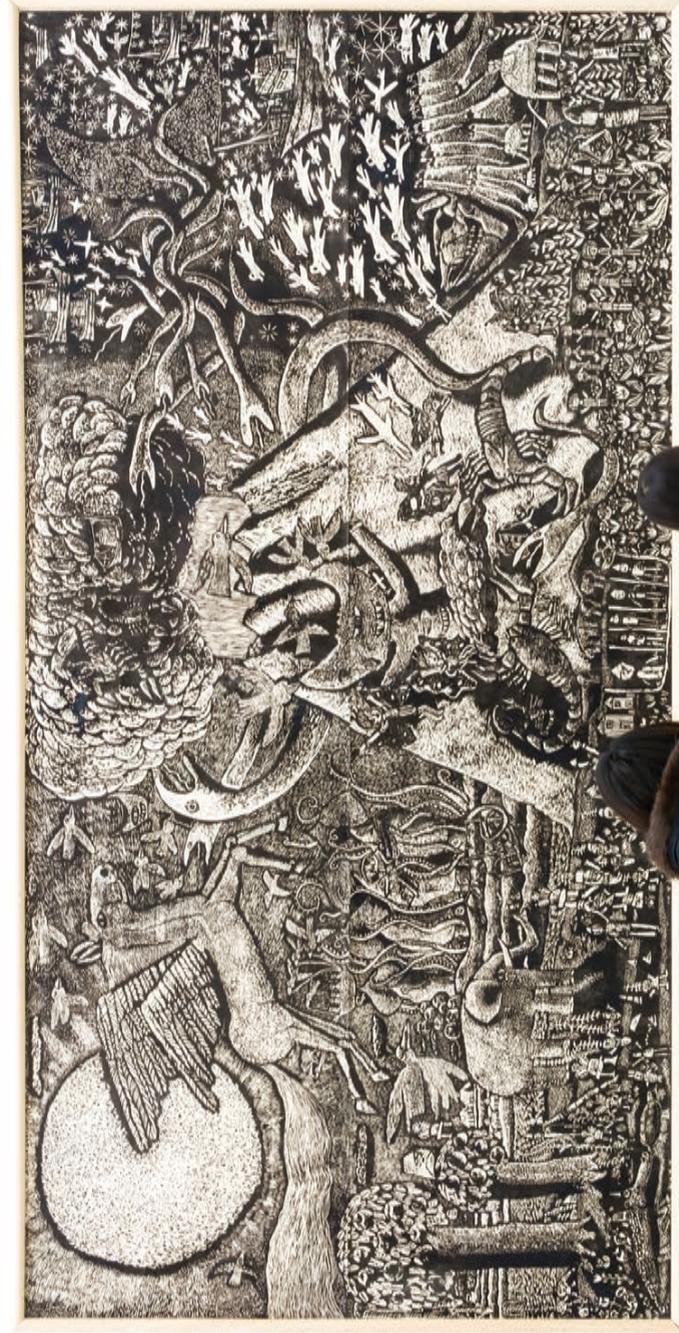
内容 坂本小九郎氏の教育活動による版画作品及び資料展示

関連イベント

「ギャラリートツアー」

1月30日(火)14:00～、2月4日(日)11:00～







展示概要

ごあいさつにかえて

坂本氏をはじめに赴任したのは鮫という漁港町の中学校。駅に降り立つと磯と魚の匂いが強く立ち込めたといいます。

氏は、この港町の活気と自然豊かな地域に版画の題材を求め、子どもたちにスケッチブックと鉛筆を持たせて町を歩き、自分たちの身近にあるものを“取材”するよう指導します。

子どもたちは自分たちの目で見たものを描きとめ、感じたことを話し合い、「彫る」「刷る」など、様々な過程を経て出来る版画という表現に夢中になりました。

指導は版画にとどまらず、読書会を開くことで、イメージから知識を深めることを促し、学期末には文集にまとめました。

このような取り組みや作品群は、教育関係者のみならず各方面から高い評価を受け、注目を集めました。なかでも、湊中学校

の養護学級の子どもたちによる共同制作「虹の上をとぶ船」は、宮崎駿監督の映画「魔女の宅急便」(1989)に作品の一部が登場したことで、さらに多くの人に知られるようになりました。

子どもたちの作品には、まちの風土や歴史、民間で語り継がれてきた物語が刻まれており、そのうち約500点が、現在、八戸市新美術館建設推進室に収蔵されています。公的美術館において教育現場で制作されたことどもの作品が収蔵対象となる例は、全国でも稀で、西日本での出展は今回が初となります。

「版画は風の中を飛ぶ種子」——40年の時を超えて京都へ飛んできてくれた版画の49点を、どうぞご覧ください。

文末になりましたが、今回の展示にあたり協力いただいた八戸市新美術館建設推進室、青森県立郷土館、坂本小九郎先生、ならびに取材協力いただいた生徒さまに、感謝申し上げます。

きょうと障害者文化芸術推進機構

出展者

坂本小九郎（さかもと しょうろう）

1934年 秋田県 生れ。盛岡短期大学 美術工芸科 卒業。
1956-1980年、青森県八戸市の中学校に勤務、1980年-1994年、宮城教育大学にて教鞭をとる。現在盛岡市在住。
著書に「虹の上を飛ぶ船——八戸市立湊中学校養護学級の版画教育実践」(1982年 あゆみ出版)、「版画は風の中を飛ぶ種子」(1989年 筑摩書房) などがある。

作者(当時の子どもたち)

鮫中学校

(1956-1962年に在籍した生徒)

南浜中学校

(1963-1967年に在籍した生徒)

江陽中学校

(1967-1969年に在籍した生徒)

湊中学校

(1970-1979年に在籍した養護学級の生徒)



1

始まり

「漁港」から「海の物語」まで

キーワード | 出発点・題材探し・漁・港・漁夫・暮らし・海・敏中学校
制作年 | 1956-1958

“ある時、版画を彫らせたら、厚い板に穴があくほどに彫り、こどもたちは次の日も、刷るのを楽しみに、私が出動するのを待っているという熱中が広がったのであった。”（「版画は風の中をとぶ種子」p.58 版画への出発）

1950年代、日本の小中学校の美術教育において「版画」の導入が進められていました。

坂本氏は、美術教師として初めて赴任した敏中学校で、版画を単に表現過程の枠とせず、版画クラブをつくり、取材・発想・表現・画集作り・公開までを網羅した指導を行います。

こどもたちは、更紙を小さく折りたたんだスケッチブックを持って、魚市場や漁港に出かけ、デッサンしました。やがて、自分の身近な人や生活圏から、ペーリングやオホホーツクの海にでかけていく漁夫たちの世界を、題材として取り上げるようになりました。海底深く沈んでいた船、アンコウに飲まれた人…。「板っ子一枚下は地獄」という厳しい生活をしていた漁夫から聞いた話を持ち寄り、どのように表現するかを話し合いました。

2

「とびたつ」姿に思いを馳せて

自画像から「うみねこ」まで

キーワード | 自己・仲間・版画クラブ・OB会・版画集作り・読書・詩・動物・思いを話す・敏中学校
制作年 | 1959-1962

坂本氏は担任クラスで「ひとり一冊運動」という読書指導に始まり、学級新聞や壁新聞作りも進めました。シートン動物記、トルストイ、ヴィクトル・ユゴー。童話や海外小説に触れることは、絵を描く際にも大きく影響を及ぼします。単に見たものを描くのではなく、その背景や歴史に思いを馳せることで、被写体への洞察を深め、そこから湧き上がったこどもたち自身の感情が、絵の中に色濃く表現されるようになりました。中でも、自分たちがうみねこになって自由に空を飛び、まちや海辺を見下ろすような構図で描かれた絵を、氏は驚きを持って見つめています。

“飛ばすことで、視点の移動、見える世界の拡大が行われる。それとともに表現の内容、主題も拡大する。（中略）これがずっと後になって、養護学級のこどもたちと制作する「虹の上をとぶ船」に連なっていると思える。”（「版画は風の中をとぶ種子」p.207「うみねこのうた」へと飛び立つ）



3

自然・暮らし

「うみう」 「南浜の生活」

キーワード | スケッチ・ドライポイント・岩・波・海鳥・美術教育・南浜中学校
制作年 | 1963-1967

第2の赴任先の南浜中学は、三陸沿岸の漁村にあり、坂本氏はここで改めて自然と向き合うことを考えます。波や岩、海鳥を描くことで、その地域や人の暮らしを表現し得ると考え、画用紙一枚、図画鉛筆一本のスケッチを根本とし、そのスケッチを元にドライポイント版画に取り組みます。当時、受験体制が色濃くなる教育現場において、改めて美術教育のあり方に、思いを巡らせる時期でもありました。

“沖を通る船に乗っている漁夫にとっては、こうした岩は、単なる風景の中の岩ではなく、あの岩の向こう側には、わが家があり、その家にはも家族が待っているのだ。家の近くの道の両側にあるハコネウツギはもう咲いたのだろうか、するとあそこの岩の近くのタイ釣り場ではタナゴが釣れる頃だとか、浜ではアワビだ、ウニだと言って忙しくなる時期もままなくだ、というふうにみる岩なのである。”（「版画は風の中をとぶ種子」 p.221-223 一本の鉛筆と一枚の画用紙から）



4

700人の生徒、700通りの構図

「船」

キーワード | 船・竜骨・江陽中学校
制作年 | 1968-1969

江陽中学校は街中に位置し、当時「1人の美術教師が700人の生徒」を担当するマンモス校でした。子どもたちに労働現場を間近に見せることが叶わない環境で、生活表現をどう形骸化させ得るかが課題だったと言います。700人の子どもたちと取り組んだ「船」を、坂本氏は丹念に分析し、一人一人の個性を見出そうと試みます。

「ひとり一冊運動」も実践しました。「竜骨」という作品を制作したこともが書いた作文があり、読書と版画が繋がる典型例として読むことができます。

“「竜骨」は造船所の隅で、もう働きつくした年若い船の中にボツンと真新しい肌を光らせていた。（中略）作品を作っている間に「おじさんのランプ」という物語を思い出した。”（「版画は風の中をとぶ種子」 p.274「船」をめぐる問いかけと構図）

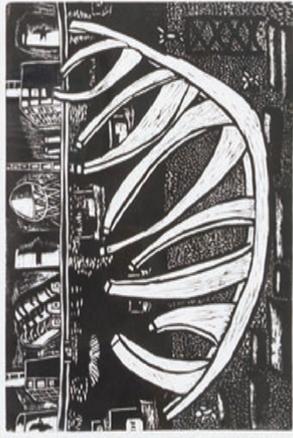


5

受け継がれる「竜骨」・養護学級のこどもたち

「船の一生」

キーワード | 船・竜骨・ラフスケッチ・イメージ・物語・共同制作・湊中学校
制作年 | 1970-1972



湊中学校で養護学級の担任となった坂本氏は、いくつかの「船」をテーマとした共同制作に取り組みました。共同作品「船の一生」の迫力ある構図や緻密な描写、完成度の高さに驚かされます。初めからこのような絵が描けたわけではなく、一人一人が自分の視点で船を描き、持ち寄り、イメージを共有しながら発展したものです。

氏は、美術教育において「過程」がいかに大切か語ります。江陽中学校で生まれた「竜骨」も、湊中学校での9年間におよぶ版画制作の中で、1つの象徴的な記号として受け継がれています。

“下絵を板に拡大する中で、それ以前のこの学級のこどもたちの作品、仲間が発見した表現のさまざまな方法——いわば造形の言語とによって——が、いわば小さな文化となった表現方法として取り入れられる。”
（「版画は風の中をとぶ種子」p.302「船の一生」が画したエポック）

6

イメージの交流

「虹の上をとぶ船」

キーワード | 船・飛ぶ・宇宙・自然・物語・共同制作・自己表現・湊中学校
制作年 | 1972-1979



「虹の上をとぶ船」は1973年4月頃から約半年かけ、13人のこどもたちによって制作された木版画集で、一人一人バラバラに彫った41枚の版画と、そこから作った物語が収められています。タイトルはこどもたちの話し合いの中で名付けられました。

中学校の「うみねこのうた」のイメージを受け継いだもので、坂本氏は指摘しています。そして作品の題材が現実生活で目にする労働現場の暗い側面や、死のイメージへと深く入り込んでしまった時、こどもたち自身がどうしたらいいか考え、願いを込めて「飛ぶ」ことを思いついたのだと、言います。

“ただ思いつきで飛ばしさえすればいいというものではない。こどもたちのそれまでの表現の積み重ねのなかで、やむにやまされず、いわば必然的に、ある課題を追求していくためにどうしても飛ばさなければならぬと思う時、自然に飛ぶのである。”（「版画は風の中をとぶ種子」p.321「虹をとぶ船」が拓いた神話的宇宙）

細部に込められた思いと時間

「虹の上をとぶ船」総集編

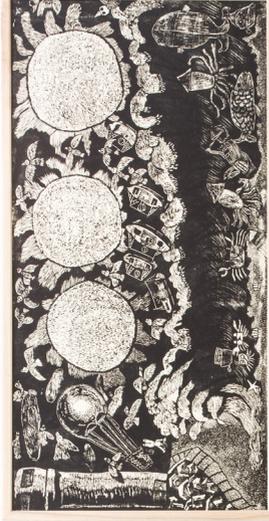
制作年 | 1975-1976

どんな些細で拙い表現でも、坂本氏は一つ一つ丁寧にすくいあげ、それが何を表しているのか聞き取りました。いたずら描きのようなラフスケッチや、文集のカットの下絵を切り抜き、みんなまで話し合い、モンタージュするかたちで紙の上に並べ、1枚の「絵」にしています。

「彫刻刀の前には手を出さないこと、彫刻刀には必ず手を添えること、一気にではなくじっくりと彫ること」、彫っていく時の氏の指導はこの3点。「ちよんちゃん彫り」を積み重ね、やがて壮大なイメージが現れます。それは養護学級のことにもたちに、自信と誇り、そして互いを認める気持ちが生まれた瞬間でもありました。

“「私は、先生にどう彫ったらいいかわからないでも、ひとりで彫った。ひとりで彫った。そして、私の人のまわりには江理子さんの彫った草花を散りばめてくれた。”（版画は風の中をとぶ種子.jp.39「虹の上をとぶ船」完結編の作品を前にして話す）





1880



どの絵がなくても…

「虹の上をとぶ船」完結編

制作年 | 1976年

坂本氏は、養護学級では国語と理科も担当し、理科の時間には実験よりもわかりやすいだろうと考え、星空観察やギリシヤ神話の読み聞かせを行なったそうです。それがやがてこどもの絵にさそり座の絵が出てくるようになってきました。「こどもの表現は心の魂のドラマである」と坂本氏の言葉通り、見るほどに、様々なドラマが浮かび上がります。



“私は、この奇妙な絵を描く子どもがおもしろくてしようがなかった。いろいろおしゃべりをしながら描くのである。この子は版画を彫り終わつたあと、「私の絵がこの版画の中になかったら、さびしくなってしまう。それにあの人のかいたイカも、それにサソリも…」と言っていた。自分の良さを認めることが第一歩、その次に自分以外のすべての人もみんな、この大きな版画にとってかけがえのない一人ひとりであることを知るということは、どんなにかすばらしいことだろう。”（「版画は風の中をとぶ種子」p.28 「虹の上をとぶ船」完結編の作品を前にして話す）





Event

虹の上をとぶ船 ギャラリートーク

1月30日(火) 14:00-

2月4日(日) 11:00-

京都府立文化芸術会館 1階展示室

art space co-jinのスタッフが見どころや魅力をご紹介します。



Exhibition 3

ぼくはふたりいるんだ — 平野智之平野智之展 —

art space co-jin

連作絵画「美保さんシリーズ」で知られる平野智之、独特の世界観で漫画とイラストを描く平野智之。それぞれ過去の「共生の芸術祭」でも話題となった2作家による“ふたり展”を開催します。偶然にも同姓同名となった二人の作家の感性が交差する、新しい試みの展示をお楽しみください。

第3会場 「art space co-jin」

展示タイトル 「ぼくはふたりいるんだ — 平野智之平野智之展 —」

住所 〒602-0853 京都市上京区河原町荒神口上ル

宮垣町83 レ・フレール1階

期間 2018年1月30日(火) - 3月18日(日)

時間 10:00 - 18:00

内容 各作家作品展示

展示作家

平野智之(東京)、平野智之(兵庫)

関連イベント

「平野智之平野智之サイン会」2月10日(土) 14:00 - 15:30



展示概要

東京と神戸の離れた地を拠点とするふたりの作家は、偶然にも同姓同名。本展のタイトルになっている「ぼくはふたりいるんだ」は、企画を持ちかけたときに東京の平野智之さんの口からふと発せられた言葉でした。

平野智之(クラフト工房 La Mano / 東京)はポップで奥行きのある構図を特徴とした連作絵画「美保さん」シリーズ、平野智之(神戸光生園/兵庫)はオリジナルストーリーによる漫画や多彩なイラストを発表。それぞれ過去の「共生の芸術祭」にも出展され話題となりました。今年度の新たな試みとして実現した二人展。これまではお互いの存在を知らずに続けてきた創作活動がその延長線上で交差します。

ふたりの平野智之は、不思議とどこかでつながり合っているようなストーリー性のある作品を描き出します。それらの絵は一見するとシンプルでありながら、ライン一本までも絶妙に描かれているのが分かります。大胆な構図に目を奪われたり、絵に添えられるひと言のメッセージに心に留めたりするうち、描き手の生き生きとした感性が伝わってくるようです。この会場でめぐり会ったふたりの共通点も探しながら、それぞれの独創的で夢のある世界が展開されました。



平野智之
ぼくは
ふたりは
いるんだ
平野智之

2018年
1月30日(火)～3月18日(日)
10:00-18:00 (月曜定休)

東京と神戸を拠点とする二人の作家は、偶然にも同姓同名。不思議とどこかでつながり合っているようなストーリー性のある作品の魅力を通して、その共通点も探しながら、それぞれがもつ作品の世界観をお楽しみください。

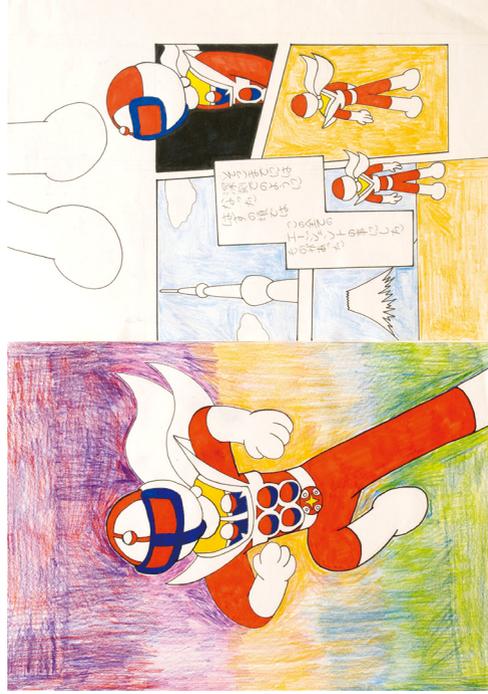
【展示のコンセプト】
平野智之と平野智之のサイン会

日時：2月10日(日) 14:00 - (19時開場)
料金：無料

平野智之(東京)と平野智之(兵庫)によるサイン会を開催いたします。当日会場にて配布する限定ポストカードに、二人の平野智之のサインを貰いましょう。



平野 智之 HIRANO Tomoyuki



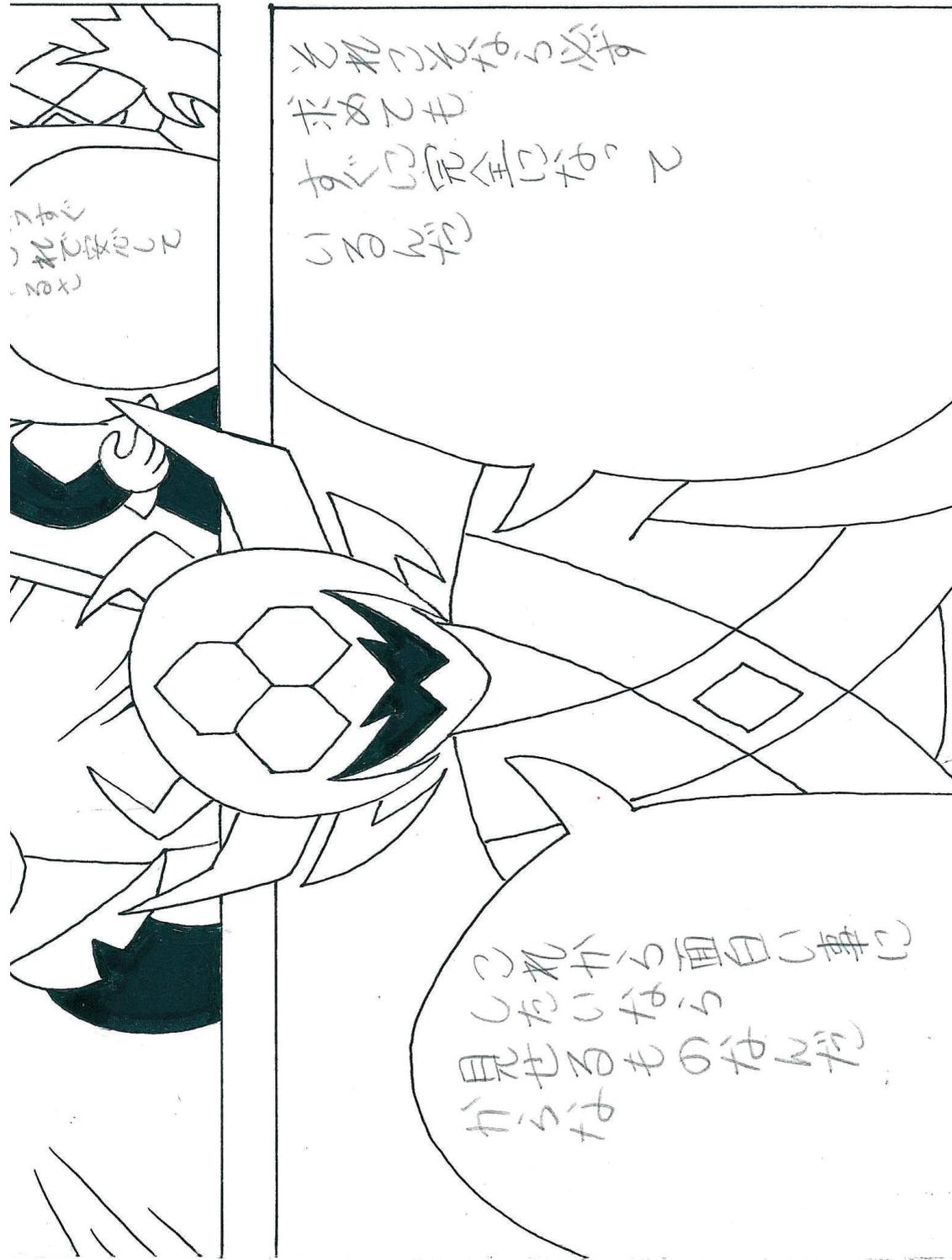
小学生の頃から宇宙一の漫画家を志す。描き続けた作品はすべて独学によるもので、大量のスケッチから生み出されている。2015年「ハートでアートこうべ2015」に入選、2017年には第12回兵庫県障害者芸術・文化祭「美術工芸作品公募展」受賞。「共生の芸術祭」へは平成27年度出展。

漫画のコマ割りからべた塗りまで、シャープペンシル、色鉛筆、油性ペン、定規を用いて描かれ、難解なセリフも独特の味わいを醸し出す。ロゴ制作も得意とし、作品の表紙などに使用されている。本展では製本も手掛けた自作シリーズ漫画やアニメ・特撮ヒーローを思わせるデザイン画の数々に加え、プラモデル箱なども出展。

展示作品

絵画 イラスト 作品ファイル スライドショー 冊子
プラモデル箱 など

1979年生まれ 兵庫県在住
(社会福祉法人 神戸聖隷福祉事業団 神戸光生園所属)





平野 智之 HIRANO Tomoyuki



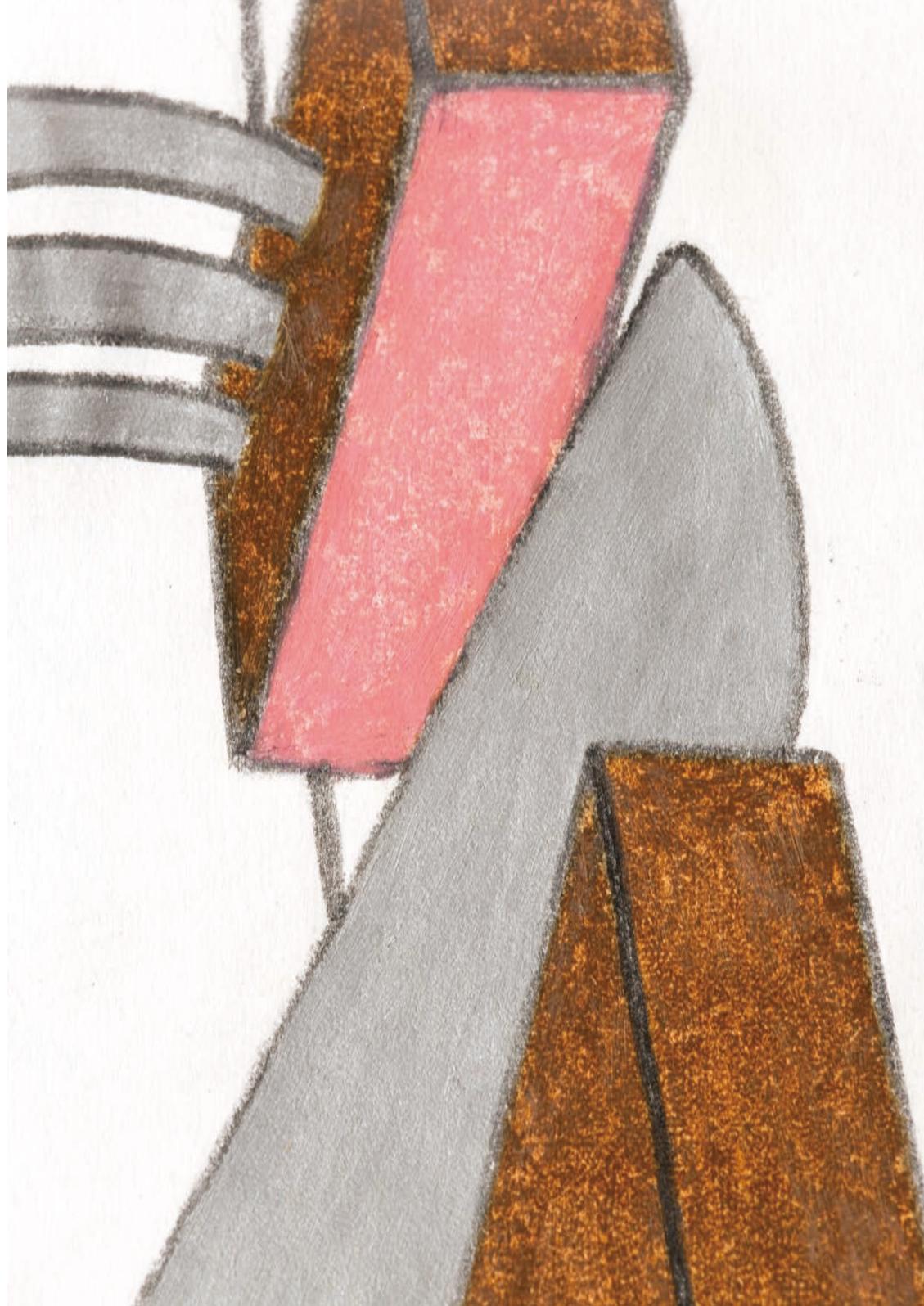
“ヒラトモさん”の愛称で親しまれる。2011年「ボコラート全国公募展 vol.2」で中村政人賞を受賞して以降、広島・京都・神奈川・青森・秋田・高知・滋賀・岐阜からフランスまで国内外に作品を発表し、注目を集める。「共生の芸術祭」へは平成26年度出展。

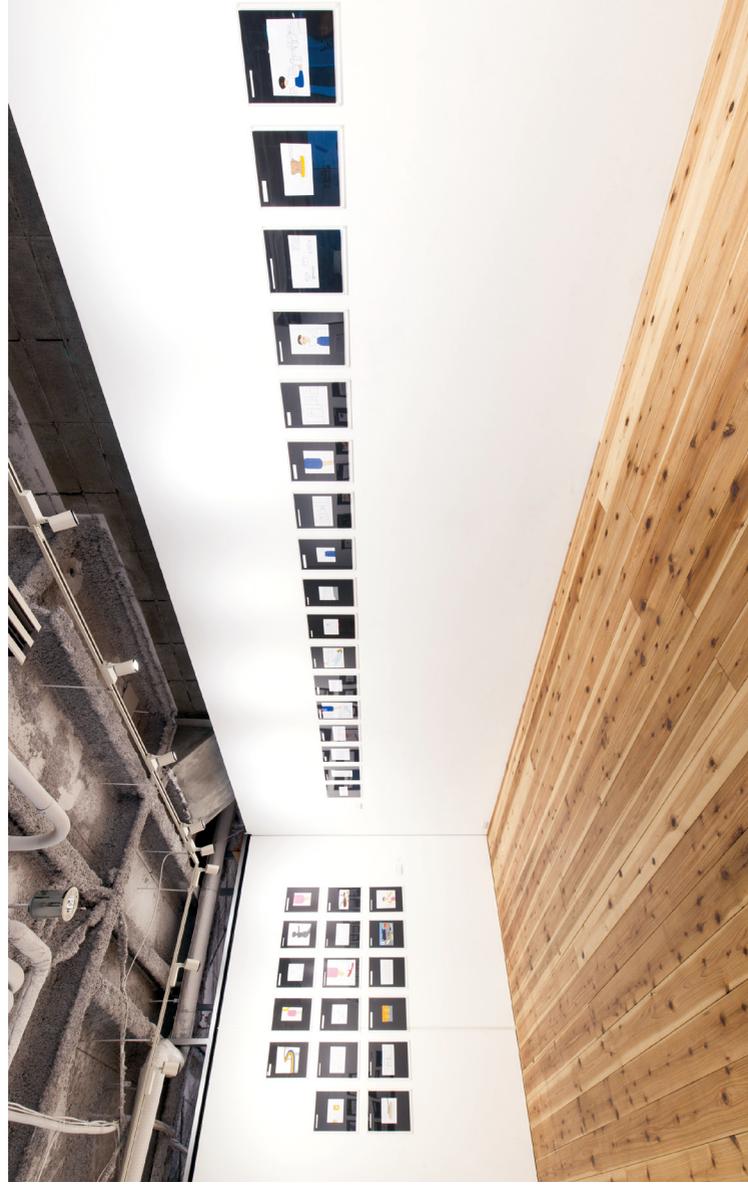
代表作である「美保さん」シリーズは、所属施設の元職員をモデルとして現実と空想が入り交じる物語の世界を描いた、連作絵画作品。今回本展に出展した新作では、京都や神戸が舞台として登場。露天風呂に入ったり、巨大化したり、いつもは穏やかな美保さんが珍しく機嫌を悪くする場面も見られた。

展示作品

- 「美保さんシリーズ パート4」 2011
- 「NEW 美保さんシリーズ IX (新東名)」 2017
- 「NEW 美保さんシリーズ V (京都)」 2016
- 「NEW 美保さんシリーズIX (神戸)」 2017
- 「美保さんシリーズ パート1-5」アーカイブ

1987年生まれ 東京在住
(クラフト工房 La Mano所属)





Event

平野智之平野智之サイン会

2018年2月10日(土) 14:00 - 15:30

art space co-jin

料金：無料

平野智之(東京)と平野智之(兵庫)によるサイン会を開催。会場にて配布する限定のポストカードに、二人の平野智之の直筆サインをいただける貴重な機会となりました。

この日、ふたりの平野は初めての対面を果たしました。





「Hello World」展をめぐる

展覧会を企画するという行為は、様々な意味で重労働だ。企画立案を行い、作品を集めて、安全に展示し、広報活動も行わなければならない。そのいずれにも、多くの人との関わりがあり、資金調達の難しさもある。各地で開催される展覧会を支えているのは、その苦労をものともしない企画者の熱意に他ならない。展覧会では、展示された作品に感動を覚えると同時に、企画者の思いに心を打たれることもある。後者に関して今回の「Hello World」展についていえば、私の心に残ったのは企画者がここまで積み重ねてきた制作者との丁寧な出会いの数々だった。

京都府内にとどまらず西日本の各地から本展に招待された作家は、村田清司さんや八島孝一さんのように古くから何度も紹介されてきた方もいれば、濱中徹さんや平田猛さんのようにこれまでほとんど紹介されてこなかった方もいる。ダブルディビ・デザイン+みっくすさいだーのようなコラボレーション型の取り組みもあれば、戸田雅夫さんのように鑑賞者との関係性に重きを置いた展示もある。このような非常にバラエティに富んだ展示が可能になったのは、企画者が日々、障がいと表現の関係について考え、様々な場所で地道な調査活動を続けてきたからに違いない。展覧会は一夜にしてできるものではないし、このIT化の時代においても情報は足で稼ぐしかないということを痛感させられる。それを実践した企画者に大いなる敬意を表したい。

展覧会には様々な目的がある。多くの人に知ってもらいたい、新しい出会いの場を創出したいというもひとつだろう。会期の短さはともかくとして、その目的のためには展覧会のロケーションや、壁面を極限まで排してフレームのみで構成された透過性の高い展示造作は理に適っている。一方、作品とじっくりと向き合い、心のひだの深いところでそれを味わうには、幾分の欲求不満を感じざるを得ない会場ではあった。両者は互いに矛盾する要求かもしれないが、とりわけ濱中徹さんの息を飲むような細やかな線や、戸田雅夫さんの手にとって読み込むことが求められる冊子、平田猛さんのすさまじい物量と力強い描写で見る者を圧倒する作品群などと対峙するには、もう少し静かで閉鎖的な環境が欲しいところだ。ここを足がかりとして、一層の広がりや深まりを期待したくなるような展覧会だった。

甲南大学文学部
服部正

「虹の上をとぶ船」に寄せて

この展覧会を見させていただいて、ストレートで力強い表現に到達した作品が少なからずあったことにまず驚かされた。作者たちが共感し、共有する世界が、作品全体にありありと存在し、一人一人が集中して制作に打ち込んでいる姿も容易に想像できた。それは坂本小九郎先生の八戸における教育実践の見事な成果であり、八戸市新美術館建設推進室（旧八戸市美術館）にこれらの作品が収蔵されていることは、「地域に密着した美術館を目指す」という設置の目的を考えれば実に適切なコレクションなのではないかと思った。

とはいうものの、一方で違和感もあったことを正直に告白しておかなければならない。それは、多くの人間が関わっているであろうにもかかわらず、そこにあまり個性が感じ取られなかったことだ。全体がバラバラでも、一人一人が個性を発揮していれば、それでいいということではなく、むしろ全体があまりにも統一感を持っていることに違和感があり、その違和感の源を改めて考え直さなければいけないのではないかと思った次第だ。

美術の指導をする場合に、一般的には子供たちが喜び、個性が出る色彩のあるクレヨンやポスター・カラーなどを選ぶのに対し、坂本先生は白黒の木版画を選び、しかもホワイト・ラインを多用する方向を選択した。そこに先生の戦略があったのではないかと推測する。技法の統一性を選択することで、子供たちから、実は正体不明の「個性」なるものとは別の特別な力を引き出すことになったのではないかと推測されるのである。

その選択によって、線を引く力量の差、色感の相違を表に出さず、いわば「個人の能力」の差異を白黒の画面が覆い隠し、制作を共通性、協働性の価値の方向に方向づけたのではないか。これは、どちらが先かはわからないが、そのことが、子供たちに、自分たちに共通する郷里の生活、海とのかかわりの中に生きる生活という主題に素直に取り組む力を自然に生み出している。それが、協働する喜びをもたらし、共通の世界を基盤とする想像力の飛躍へと繋がっていったのではないかと思う。しかも、直彫りの木版画は、制作者にしっかりした身体上の実感を残す技法である。この実感の上に、一人一人の彫りの力と版の上の白黒の対比によって予想以上の表現力が生まれる

という結果を目の当たりにしたことは、さぞかし子供たちにも満足感を与えたことだろう。そして、これこそが子供たちのさらなる制作への動機と意欲へと繋がっていったのだろう。坂本先生は、創意工夫に富んだ発想ですこぶるいい循環を生み出したのだ。

先生という職業の常として起こること、つまり転勤の際にも、坂本先生が、前任地での成果を次の赴任地に持ち運び、新しい生徒たちに自分たちの視点から受け継がせていったことも、巧みな仕掛けであったと思う。子供たちは、共有する世界と表現している力に自然に反応し、自分も同じ場に立ちたいと思っただろうと推測される。それだけでなく、彼らは、それまで以上のものを求めて、自分たちの想像力と創作意欲を高めていっただろう。共同制作された版も、おそらく先生がその維持にほんとうに苦心したと思われる、そうした共有性、協働性を基盤にして、成り立って行ったのだろう。刷り上がった自分たちの作品を目を輝かせて見入っている子供たちの姿がありありと想像できるのではないか。

京都市美術館館長
潮江宏三

作品リスト

題名 | 制作年 | 技法・素材 | 寸法 (mm)

Exhibition 1

平田猛

- p.16 「無題」2017 | 紙に色鉛筆 | 210×297
- p.17 「無題」2017 | 紙に色鉛筆 | 210×297
- p.19 作品部分
- p.21 「無題」2017 | 紙に色鉛筆 | 210×297

八島孝一

- p.22 「ロボット」制作年不明 | ブランター、毛糸、がちゃがちゃのカプセル、金具類、プラグ、セロハンテープ | 175×155×120
- p.23 「ロボット」部分

村田清司

- p.28 「無題」制作年不明 | 楮和紙にコンテ | 145×100
- p.29 「無題」部分
- p.31 「無題」部分
- p.32 「無題」 | 制作年不明 | 紙に色鉛筆 | 部分

濱中徹

- p.34 「ちいさなもののたち」2007または2008 | イラストボード、水彩、鉛筆 | 361×515
- p.35 「ブーメランカメラ」詳細 | 制作年不明 | イラストボード、鉛筆、透明水彩 | 286×380
- p.36 左「蛹のなかで春を夢見る」不明 | 紙、水彩、鉛筆 | 348×349
中「ガンゲン博士の標本」不明 | イラストボード、水彩、鉛筆 | 201×550
右「鉱石ラジオのちいさな音楽」不明 | 紙、鉛筆、アクリル絵の具 | 220×515
- p.37 左「やがて雪が」2016または2017 | カラーボード、アクリル絵の具、鉛筆 | 363×363
中「ブーメランカメラ」不明 | イラストボード、鉛筆、透明水彩 | 286×380
右「道端のちいさなもの」2000または2001 | 紙、水彩、鉛筆 | 318×321
- p.38 左「道端」1998または1999 | イラストボード、鉛筆、透明水彩 | 362×515
中「ちいさなもののたち」2007または2008 | イラストボード、鉛筆、水彩 | 361×515

- 右「歌を聞きたい」2009または2010 | イラストボード、水彩、鉛筆 | 363×515
- p.39 「歌を聞きたい」2009または2010 | イラストボード、水彩、鉛筆 | 363×515

川上達次

- p.40 「流血雄也」2017年 | キャンバスに油彩 | 1303×1620
- p.41 「流血雄也」部分
- p.42 「ベス」2012年 | パネルに油彩 | 532×632
- p.43 手前左「アンソンさん」2015年 | パネルに油彩 | 455×530
手前中「カウボーイ平谷さん」2013年 | キャンバスに油彩 | 410×318
手前右「葉巻とガンマン」2013年 | 油彩 | 455×530
- p.44 左「流血雄也」2017年 | キャンバスに油彩 | 1303×1620
中「ネコの逆襲」2005年 | キャンバスに油彩 | 1620×1303
右「小象のダイスケ」2004年 | キャンバスに油彩 | 1620×1303
- p.45 「ネコの逆襲」2005年 | キャンバスに油彩 | 部分

戸田雅夫

- p.47 「とだみくじ」イベント会場風景
- p.48-49 「戸田雅夫さんのノート」

国保幸宏

- p.52 「チェリスト」制作年不明 | オイルパステル・アクリル絵の具・紙 | 545×789
- p.53 「チェリスト」部分
- p.54 左「ココ・コーラ」制作年不明 | オイルパステル・アクリル絵の具・紙 | 641×530
右「ファラオ」制作年不明 | 鉛筆、オイルパステル、紙 | 542×392
- p.55 「カップケーキ」詳細 | 制作年不明 | オイルパステル・アクリル絵の具・紙 | 545×789
- p.56 「怪獣」制作年不明 | オイルパステル、紙 | 530×641
- p.57 左「花の小物」制作年不明 | オイルパステル・アクリル絵の具・紙 | 545×789
右「ひつじ」制作年不明 | オイルパステル・アクリル絵の具・紙 | 545×789

中村清剛

- p.58 「無題」制作年不明 | 紙にペン、鉛筆 | 210×297

ダブディビ・デザイン+みっくすさいだー

- p.62 「タベストリー」みっくすさいだー
- p.63 原画：「無題」中村清剛 制作年不明 | 紙に鉛筆
「トートバッグ、タベストリー」みっくすさいだー
- p.64 原画：「ヘキサゴンとペンタゴン」2011年 作者：長村良彦 | 紙にアクリル 380×270
商品サンプル制作：株式会社フェリシモ、ダブディビ・デザイン
- p.65 原画：左原画：「夏のおじさいの わがしのおいがる森の小びとの ようせいたちのカフェテラス」作者：枝松直子 | 紙に水彩 | 360×255
右「夏の貼り絵」山出高平 | 紙に色紙 | コラーージュ | 540×380
商品サンプル (ハンカチ) 制作：ブルーミング中西株式会社、ダブディビ・デザイン
- p.68-69 「とだのみ IN 京都」イベント風景
- p.70-71 みずのてつおワークショップ | イベント風景

Exhibition 2

- p.75, p.90, p.92 「虹の上をとぶ船」完結編 制作：湊中学校養護学級 1977年 | 木版 | 2000×4000 | 青森県立郷土館所蔵
- p.76 資料展示「文集 みなと」湊中学校 1973, 1975年 263×183 坂本小九郎氏所蔵
- p.77, p.91, p.93 「虹の上をとぶ船」完結編 (部分) 制作：湊中学校養護学級 1977年 | 木版 | 2000×4000 | 青森県立郷土館所蔵
- p.80 木版画集「海の物語」表紙 制作：鯨中学校 1958年 | 木版 | 454×358
- p.81 「うみねこ ひなと親鳥」制作：鯨中学校 OBはまなすの会 制作年不明 | 木版 | 235×150
- p.82 「うみう・波間をとぶ」制作：南浜中学校 1964年 | ドライポイント | 174×250
- p.83 「船 竜骨」制作：江陽中学校 1969年 | 木版 | 303×453
- p.84 「船の一生 2 竜骨」制作：湊中学校養護学級 1972年 | 木版 | 302×457
- p.85 「虹の上をとぶ船 23 おこった鯨は船をのみこむ」制作：湊中学校養護学級 1973年 | 木版 | 305×451
- p.86 「虹の上をとぶ船」総集編 II 3 星空をベガ

- サスと牛が飛んでいく 制作：湊中学校養護学級 1976年 | 木版 | 1000×2000
- p.87 「虹の上をとぶ船」総集編 II 2 サソリと白い鳥の争い (部分) 制作：湊中学校養護学級 1976年 | 木版 | 1000×2000
- p.88 上段左「虹の上をとぶ船」総集編 I 1 大鳥に乗って星空を飛ぶ子ども 制作：湊中学校養護学級 1975年 | 木版 | 1000×2000
上段右「虹の上をとぶ船」総集編 I 3 つの太陽 制作：湊中学校養護学級 1975年 | 木版 | 1000×2000
下段左「虹の上をとぶ船」総集編 I 2 太陽にむかって飛ぶ鳥の群 制作：湊中学校養護学級 1975年 | 木版 | 1000×2000
下段右「虹の上をとぶ船」総集編 I 4 海辺の森と花 制作：湊中学校養護学級 1975年 | 木版 | 1000×2000
- p.89 上段左「虹の上をとぶ船」総集編 II 1 海神が現れる 制作：湊中学校養護学級 1976年 | 木版 | 1000×2000
上段右「虹の上をとぶ船」総集編 II 3 星空をベガサスと牛が飛んでいく 制作：湊中学校養護学級 1976年 | 木版 | 1000×2000
1000×2000
下段左「虹の上をとぶ船」総集編 II 2 サソリと白い鳥の争い 制作：湊中学校養護学級 1976年 | 木版 | 1000×2000
下段右「虹の上をとぶ船」総集編 II 4 花の太陽から花がふる 制作：湊中学校養護学級 1976年 | 木版 | 1000×2000
(p.80-89八戸市新美術館建設推進室所蔵)

Exhibition 3

平野智之 (兵庫)

- p.100 「鉄人仮面」2017年 | 紙に鉛筆、色鉛筆、油性マジック
- p.101 「太空勇者仮面 5」より部分 制作年不明 | 紙に鉛筆、油性マジック、ペン

平野智之 (東京)

- p.104 「美保さんシリーズ パート4」2011 紙に色鉛筆 | 210×297
- p.105 「NEW美保さんシリーズ IX (新東名)」2017 | 部分
- p.106 左「NEW美保さんシリーズIX (新東名) 2017 右「NEW美保さんシリーズV (京都) 2016
- p.107 「NEW美保さんシリーズIX (新東名) 2017



アンケート

Hello World

第1会場 イオンモール京都桂川

● イオンモールという場所で（いろんな世代の人が来る）アートの幅の広さを感じた。何がアートか…!? とかありますが、もっと多くの人に見てもらいたいな…

● 言葉1つ1つが新しい気づきをもたらしてくれます。自分がいかに回りのものを見ていなかったか、見ているようで、「これはこうあるもの」という先入観念でものを見ていたことに気づきます。

● ディスプレイが見やすく、キレイでびっくりしました。コンパクトなのに広々して、バリアフリーでした。大きな作品から立体作品、いろんなアートがあつてどの年代にも受けると思いました。

● いろんな地域のいろいろな作家の作品が見られてよかったと思います。1つ1つの作品に力があって、ものの本質のようなことを考えさせられます。

● 一部でもいいので販売もできるようにしてもらったらいいのでは。

● ワークショップなど作者と出会える展示、イベントがあればよいです！



虹の上をとぶ船

第2会場 京都府立文化芸術会館

● 坂本先生の情熱と子どもたちの熱意・熱中を思い感激しました。世界をどう感じるかを表現するという、自分と他者のよさを認め合うこと、美術は生き方、考え方を学ぶ大切な活動だと思いました。

● 過程を大事にするという教育方針の良さが作品にあらわれていると思いました。自分が学校で版画にとりこんでいた時は危ない面倒だして好きとはいえなかったのですが、今回の作品群が内包する時間の豊かさを感じて、なんとも勿体ないことをしていたと考えさせられます。

● 作品の制作年、作者の名（イニシャルでも、月日、人数など）などが欲しいと思いました。生活、労働を見る眼の確かさ、そして、物語や、自然にふれて、イメージーションをふくらませていくようすが伝わってきました。

● ジブリの映画で見て、不思議な絵だと思い、誰が描いたんだろうと、ずっと思っていました。やっぱり長い積み重ねがあつて出来た作品だったのですね。これでよくわかり、すっきりしました。

● 素朴な作業のあつまりが、ものすごいエネルギーになって感じられる。

● アンコウの腹の中から人間の骨が出てくる作品。漁のきびしさを目で身体で心でとらえて表現している。「虹の上をとぶ船」の中のかわいい女の子。作品全体がすばらしくその中に自分の版画がないとこの作品がさみしくなると語った感覚がすごいと思った。



● 希望なのか、または悲しさなのか、いろいろな感情が伝わってくる作品の数々でした。

● 何年もの蓄積にぐっときます。「いきなり船がとぶわけでない」、あーそうだーってなりました。

● 「竜骨」、船の底」。大作はとてすばらしく、何時間でもぼーっと見ていたい気持ちでした。小さな作品はどれも「ほんまよう見てるなー」としずかに感動するものばかりで、中でもこの2作品には特に、何か打たれるものがありました。

ぼくはふたりいるんだ

第3会場 art space co-jin

● 兵庫の平野さんの作品は、以前にも一度見たことがあります。その独特のデフォルメと難解なセリフが合わさったシュールな世界観は健在でした。東京の平野さんの作品は、多分初めて見ましたが、キレイな色使いと主人公の美保さんのちょっと変わった物語は、兵庫の平野さんと似た所があつて、不思議とマッチしていました。同姓同名だけど、作風が違う二人の展覧会、面白い試みだったので、またやって欲しいです。願わくは、平野さんの「ヒーロー

マンガ」にもう一人の平野さんのキャラクター「美保さん」が特別出演するといったコラボとか見てみたいです。これからもお二人の活躍に期待します。

● お二人ともとてもステキな絵でした。とても可愛い絵ですが、緻密さもあり、見入ってしまいます。これからもぜひ作品を発表し続けてください。

● とても面白く、お二人言葉がいい。ずっと読んでると、アナザーワールドに飛びそうです。

● ステキです。きれいな線と、元気で優しい物語ばかりで楽しかった。「ぼくはふたりいるんだ」というタイトルもすばらしいです。ヒラトモさんのテレビ（NHK）を見て、目が離せなくなったので、みに来ました。本当に来て良かったです。ヒラトモさんも、平野さんも、ふたりのぼく最高！ 大ファンになりました!!! 大好きです！

● 大好きな美保さんシリーズ！ 不機嫌な美保さんもかわいい。言葉の表現は、どちらの平野さんの作品も、思わず声に出して読みたいですね。



きょうと障害者文化芸術推進機構 事業実績

「障害のある人もない人もともに安心していきいきと暮らしやすい社会」を目指し、共生社会の実現に向け障害者の文化芸術活動を推進することで、府民の障害への理解を深め、障害者の社会参加の促進を図る。
文化芸術活動をととした共生社会実現に向けた中核組織として活動。

講座開催／ワークショップ実施／サポーター養成



co-jinサポーター講座① 講師／松尾恵
作品と出会い、展示するまで
—ギャラリストの仕事とは ヴォイスギャラリーの歩みから—
平成29年11月10日(金)



co-jinサポーター講座② 講師／山下里加
はじめての文化政策
—福祉と文化の幸福な関係とは?—
平成29年11月21日(火)



co-jinサポーター講座③ 講師／入交佐妃
作品を撮影しよう!
デジタルカメラ基礎講座(実習付き)
平成30年2月19日(月)



co-jinサポーター講座④ 講師／拾井美香
アートにまつわる著作権基礎講座
—知っておきたいこと・基礎のキー—
平成30年2月28日(水)



サポーター施設見学会&交流会
NPO法人スウィング
平成30年3月28日(水)

平成29年度 art space co-jin

SO LUCKY!!!

相楽福祉会作品展
SO LUCKY!!!
2017.4.4 Tue - 5.21 Sun
12:00-18:00 (最終17:00)

art space co-jin
〒604-8588 京都市東山区南禅寺1-1-1
TEL:075-251-1111 FAX:075-251-1112
E:art@space-co-jin.com

相楽福祉会(相楽郡精華町)
平成29年
4月4日(火)~5月21日(日)

co-jin collection
—コジコレ— No.3

平成28年とっておきの芸術祭より
出展者を選出
平成29年
8月1日(火)~9月24日(日)

ART LOUNGE
exhibition

ART LOUNGE
exhibition
2017.12.12-2019.01.21
12:00-18:00

Ackey・XL・
藤橋貴之・国保幸宏
平成29年12月12日(火)~
平成30年1月21日(日)

DO art EXPO
ドアパク

2017.5.30 Tue - 7.23 Sun
12:00-18:00 (最終17:00)

障害者支援施設 DO
平成29年
5月30日(火)~7月23日(日)

Swing Languel!
—スラング!—

NPO法人スウィングより
詩作品の展示
平成29年
10月3日(火)~12月3日(日)

「共生の芸術祭」
ぼくはふたりいるんだ
—平野智之平野智之展—

平野智之(兵庫)・
平野智之(東京)
平成30年
1月30日(火)~3月18日(日)

展示協力 (イオンモール京都桂川会場) アートSKY塾、アトリエとも、一般財団法人 川越病院、株式会社ぬか、株式会社フェリシモ、京都市ふしみ学園 アトリエやっほう !!、社会福祉法人 しがらき会 信楽青年寮、社会福祉法人 日本ヘレンケラー財団 ぶるむむ此花、社会福祉法人 ふたかみ福祉会 はびきの園、特定非営利活動法人 希望の園、柗仲江 (株式会社ダブディビ・デザイン)、藤田一美 (京都市こみ減量推進会議)、ブルーミング中西株式会社 (京都府立文化芸術会館会場) 青森県立郷土館、坂本小九郎、八戸市新美術館建設推進室、八戸市立湊中学校、正谷伸夫 (八戸市公会堂館長) ヤマトロジティクス株式会社 (art space co-jin会場) クラフト工房 LaMano、公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団 横浜市民ギャラリーあざみ野、社会福祉法人 神戸聖隷福祉事業団 神戸光生園 (50音順・敬称略) **参考出展** 枝松直子、長村良彦、山出高平 (50音順・敬称略) **会場構成・設営** (イオンモール京都桂川会場) dot architects **ビジュアルデザイン** UMMM **印刷** 株式会社サンエムカラー、株式会社グラフィック **撮影** 衣笠名津美、当機構スタッフ、丹正和臣 (ぬか つくるところ) **コピー制作** 西内亜都子 **主催** きょうと障害者文化芸術推進機構 (構成団体) 独立行政法人国立美術館京都国立近代美術館、独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館、公益財団法人京都文化財団、京都市美術館、みずのき美術館、公益財団法人京都市芸術文化協会、公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団、京都日本画家協会、京都工芸美術作家協会、一般社団法人京都府身体障害者団体連合会、京都障害児者親の会協議会、一般社団法人京都手をつなぐ育成会、公益社団法人京都精神保健福祉推進家族会連合会、京都知的障害者福祉施設協議会、特別支援学校長会、公益財団法人大学コンソーシアム京都、京都商工会議所、京都新聞社、公益財団法人京都新聞社会福祉事業団、NHK京都放送局、株式会社京都放送、KBS京都、京都市府市長会、京都府町村会、京都府、京都市

Special thanks (順不同・敬称略) 熊越浩平、城岸美穂、大手理絵、谷口おかる、並木清貴、朝倉浩之、長谷川葉月、大倉佐知子、生實良子、塩見祐久、山崎知子、山本憲孝、イオンリテール、イオンモール京都桂川各テナント and more...

平成29(2017)年度
共生の芸術祭

Hello World 展示記録

発行 きょうと障害者文化芸術推進機構
編集 きょうと障害者文化芸術推進機構 事務局
装丁・デザイン 宗幸 (UMMM)
印刷 株式会社グラフィック

2018年3月31日発行

お問い合わせ
art space co-jin きょうと障害者文化芸術推進機構
〒602-0853
京都市上京区河原町通荒神口上ル宮垣町 83 レ・フレール 1 階
TEL&FAX 050-1110-7655
Email info@co-jin.jp
URL http://co-jin.jp

※本書に掲載されている作品の著作権は作者に帰属いたします。一切の複製・無断転載を禁じます。